

令和元年度

幼児教育のあゆみ

その45

高知県国公立幼稚園・こども園会

令和元年度

幼児教育のあゆみ

その45

高知県国公立幼稚園・こども園会

はじめに

今年度も高知県国公立幼稚園・こども園会の活動をまとめる時期となりました。高知県国公立幼稚園・こども園会、園長等部会、主任等部会の事業報告及び4支部の研究成果のまとめとして、研究集録「幼児教育のあゆみ その45」を発刊します。

会員の皆様のご支援とご協力に心より感謝いたしますとともに、この1年の皆様の熱心な取り組みがそれぞれの園の成長へとつながり、次年度の研究や実践にいかされることを願っています。

幼稚園教育要領等が全面実施となり2年が経過し、昨年10月からは幼児教育・保育の無償化の取り組みが実施となるなど、今幼児教育を取り巻く環境は刻々と変化していています。その中であって私たちが守るべきもの、大切にすべきことは、子どもたちの健やかな成長とそれを支える質の高い教育を追求し続けることではないでしょうか。幼児教育の基礎基本を大切にし、子どもたちの中に、未来社会を切り拓く「生きる力」を育てていくことが重要です。質の高い幼児教育の振興と充実を図るため、国公立幼稚園・こども園会のより一層の組織力の結集と、研究の推進に努めていきたいと思えます。

終わりに、研究推進にあたり、ご支援・ご協力賜りました高知県教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ各関係機関、並びにご指導いただきました諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

高知県国公立幼稚園・こども園会 会長 西村 芳美

祝 辞

高知県国公立幼稚園・こども園会の皆様のご努力と優れた研究の積み重ねにより、このたび「幼児教育のあゆみ45号」が発刊されることを心からお喜び申し上げます。

皆様方が熱心に取り組んでこられた研究の成果は、本県の幼児教育の充実とともに、保育者の資質向上につながるものであり、日々、研鑽を積まれておられますことに敬意を表します。

平成30年4月より施行となった新幼稚園教育要領等では、幼児期の教育から小・中・高等学校までを見通して育成を目指す資質・能力が示され、多様な体験に関連して、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現できるよう、指導計画の作成と、幼児理解に基づいた評価がさらに重視されるなど、全ての保育者の資質・指導力の向上とともに、幼稚園教育要領等に基づく幼児教育の充実がますます求められています。

高知県教育委員会では、平成28年3月に策定された「高知県教育等の振興に関する施策の大綱」いわゆる「教育大綱」と、それを具体的に実践するための「第2期高知県教育振興基本計画」の中で、「就学前教育の充実」を位置づけ、教育・保育の質の向上に取り組んでまいりました。現在、次期大綱の策定に向けて、これまでの4年間の成果と課題を洗い出し、見直しを進めているところですが、次期大綱においても、基本方針に位置づけ、さらに重点的に取り組む予定です。

その取組の一環として、園内研修支援はもとより、園の教育・保育活動とその他の園運営の状況について評価を行い、その結果に基づいて、園及び設置者等が園運営の改善を図ること、評価結果等を広く保護者や地域社会等に公表していくことが求められていることから「保育所・幼稚園等における園評価の手引き」などを作成しました。

質の高い幼児期の教育は、園評価を適切に実施し、組織マネジメントを効果的に推進する仕組みを構築することなど、生涯の人格形成の基礎を培う重要な時期を担う教員の皆様方の自らの力量を高めようとする意識・意欲と、研究の積み重ねから生まれてきます。高知県国公立幼稚園・こども園会の研究は、幼児一人一人の発達を踏まえながら計画的・意図的な保育を行い、子ども理解に基づき自らの実践を振り返る質の高い内容となっており、本県の幼児教育の向上に大きく寄与するものと考えております。

高知県国公立幼稚園・こども園会におかれましては、子ども一人一人の健やかな育ちを保障するため、今後も、幼児教育の先進的な研究、実践を積み重ねられ、本県の幼児教育を先導する役割を担っていただけることを期待しております。

結びに、高知県国公立幼稚園・こども園会の今後ますますのご発展と会員の皆様方のご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

令和2年2月

高知県教育委員会事務局 幼保支援課長 戸田京子

目 次

○はじめに	高知県国公立幼稚園・こども園会会長 西村 芳美	
○祝 辞	高知県教育委員会事務局 幼保支援課長 戸田 京子	
I. 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会	事業報告	1
II. 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会	園長部会事業報告	5
III. 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会	主任等部会事業報告	6
IV. 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会	研究部	7
講演		
「子どものほめ方・叱り方ー子育てに応用できる心理学ー」		
高知大学 玉瀬 友美 先生		
○東部支部		12
○高知支部		19
○中部支部		27
○高岡支部		41
編集後記		50

I 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会 事業報告

活動方針

平成30年度、幼稚園教育要領等が全面実施となり、本年は2年目を迎えた。全国国公立幼稚園・こども園長会は、「環境を通して行う教育」「遊びを通しての総合的な指導」という幼児教育の基礎・基本に沿った実践を通して、日々、質の高い教育の実現を目指している。また、幼稚園教育要領等の理念を具現化した実践を発信することで、日本の幼児教育全体の質の維持・向上に努めている。

本会は、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」の実現を図り、次代を担う人間性豊かな国民の育成を目指すとともに、国際社会において信頼される日本人としての素地を培うため、学校教育の基本に基づく望ましい幼児教育の実現に寄与するものである。

幼児は家族をはじめとする身近な大人の愛情に包まれ、心の安定を得ることによって自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもって主体的に生活できるようになる。しかし、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や技術革新による急速な社会生活の変化に伴い、保護者の価値観の多様化、核家族化が進み、限られた人間関係の中で子育てをする家庭が増加する傾向が見られる。虐待やいじめが社会問題となっている昨今では、保護者が子育ての第一義的責任を有していることを自覚し、子どもに愛情を注ぎ、子育ての喜びを感じることができるようになることが大切である。これらの今日的課題を受け止め、幼児教育において、予測できない変化に主体的に取り組み、他者と協働して課題を解決し、様々な情報や知識を新たな価値につなげて、自らの目的にしていくことができる未来の創り手を育てていくことが重要である。

今こそ、全国の国公立幼稚園・こども園は、将来この国を担う人材の育成という大きな視点に立ち、質の高い幼児期の学校教育の推進・充実を目指し、本会の組織力を結集して、それぞれの地域の特性を生かした園の経営及び教育内容を充実させることが求められている。また、家庭や地域との連携を更に深めるとともに、子育ての支援を推進し、家庭や地域の教育力の向上に力を尽くしていく。

幼児教育施設が多様化する中で、幼児教育の質の維持・向上を図るには、本会の全国に及ぶ組織が機能し、つながりを更に盤石なものにする必要がある。各都道府県・市区町村の幼稚園・こども園長会の活動を通して、情報の共有化、事業の活性化等、組織の強化を図り、全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会及び関係諸機関との連携を密にしてリーダーシップをとって諸課題の解決に努めていく。また、引き続き東日本大震災等での教訓を基に、教育活動の一層の充実や安全な教育施設の整備に向けて、関係諸機関への働き掛けを行う。

以上の活動方針に基づき、次に掲げる事項を本年度の活動の重点とする。

【活動の重点】

1 幼児教育の質の維持・向上とリーダーシップの発揮

- ・幼稚園教育要領等の理解を深め、幼児教育の質の維持・向上を目指して、遊びを中心とした生活の中で、体験を通して学ぶ幼児教育の本質を踏まえた指導内容・方法・教材及び評価の改善等の工夫や充実を努め、その重要性を発信するリーダー的な役割を担う。
- ・幼小の接続に関する研究、幼児と児童との交流、教員同士の交流や合同研修会等の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有することにより小学校の教育内容との円滑な接続を推進する。さらに人事交流の重要性を発信する。
- ・国公立幼稚園・こども園が地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を一層果たし、関係各方面に

働き掛け、様々な教育施設・機関との連携を推進する。

- 学校評議員等の設置率を一層高めるとともに、学校評価を確実に進め、教育内容や成果を分かりやすい形で情報発信することに努め、園経営の充実を図る。

2 3年保育実施の拡大と預かり保育の充実

- 希望する全ての幼児が学校教育としての幼児教育を受けられるよう、関係諸機関へ働き掛ける。核家族化、少子化が広がっている状況を踏まえ、3年保育実施の拡大および幼稚園における預かり保育の充実が、待機児童解消に確実に貢献している実績を発信しつつ、幼稚園教育要領に示されている幼児にとってふさわしい教育活動としての預かり保育を実践する。

3 家庭や地域社会の教育力の向上と次世代育成支援の推進

- 親子の居場所づくりや子育ての支援の推進、保育所・子ども家庭支援センター等との連携、預かり保育の充実等、地域におけるネットワークの構築を図り、弾力的な運営に努める。また、保護者が教育活動に参画できる機会を提供し、保護者の教育力を生かした園経営を推進する。
- P T A等の組織と連携を図り、家庭や地域との豊かなつながりの中で親子の絆を深め、親と子が共に育つ場を提供する。また、「身近な自然との関わりを通して子どもの豊かな感性を育むための調査研究」を行い、その成果や提言を情報として発信し、子育ての支援を充実させ園経営の推進を図る。

4 教員・保育士の資質及び専門性の向上

- 人権感覚を磨き、学び続ける姿勢をもった教員・保育士を育成するために、資質及び専門性の向上を目指す研修の体系化を図り、研修体制を一層充実させるとともに、免許の上進などについても地域の教員・保育士養成課程を有する大学や幼児教育研究団体等との連携を図る。
- 教育・保育の多様な課題に柔軟に対応できるような実践力のある教員・保育士を育成するため、国の動向や幼児教育の重要性等、最新の情報を発信して、各園長がリーダーシップを発揮できるよう支援する。
- 幼児教育センターや教育アドバイザーが果たす役割の重要性を訴え、研修の充実や相談機関の設置を働きかける。

5 教育・保育の充実のための条件整備

- 教員・保育士が仕事と生活を両立させ、意欲をもって従事できる勤務体制の改善や人的・物的な条件整備が図られるよう、各都道府県・市区町村の状況に応じて、全国国公立幼稚園・こども園P T A連絡協議会等と連携し、関係諸機関に積極的に働き掛ける。
- 学校教育の一翼を担う教職員の職責に相応する適正な処遇を得て、資質の高い意欲的な教員・保育士が確保されるよう、要望活動の強化に努める。
- 学校における働き方改革を受け、事務作業の軽減等の勤務環境整備のための支援が図られるよう要望活動を積極的に進める。
- 特別支援教育の充実に向け、人的・物的な条件整備が図られるよう、更に関係諸機関に働き掛ける。
- 東日本大震災等での教訓を基に、教育・保育の一層の充実を図り、施設の安全性を高めるため、引き続き関係諸機関に働き掛ける。また、被災地への積極的な支援活動を行う。

6 高知県国公立幼稚園・こども園会の充実

- ・平成27年度の「子ども・子育て新制度」により就学前の保育・教育の枠組が変わり「こども園」に移行する園が増加してきている。高知県は少子化が顕著で幼稚園に在園する園児の数が急速に減少してきている。今後は、国公立幼稚園・こども園会の組織を盤石化していくために英知を結集し、研究推進体制、組織体制を改善していかなければならない。
- ・幼稚園教育の重要性をアピールするために『幼稚園ウィーク』をさらに進化させ、内容の充実を図っていかなければならない。
- ・高知県少子化対策推進県民会議に参加し、子育て支援の一翼を担うようにする。
- ・四国国公立幼稚園・こども園園長会と連携を深め“四国はひとつ”という思いのもと積極的に情報交換する。

主要行事

- (1) 高知県国公立幼稚園・こども園会・評議員会（附属幼稚園）・・・4/24・2/27
- (2) 高知県国公立幼稚園・こども園会・理事会（附属幼稚園）・・・4/24・2/27
- (3) 高知県国公立幼稚園・こども園会総会 研究大会（高知県教育センター）・・・5/18
- (4) 高知県国公立幼稚園・こども園会歓送迎会懇親会（越知幼稚園担当）・・・5/18
- (5) 研究推進委員会・・・5/18・6/5・11/7・12/25・3/11
- (6) 主任等研修会・・・8/22・11/20・2/12
- (7) 園長研修会・・・7/22・8/25・1/16
- (8) 高知県国公立幼稚園・こども園P T A研究大会（野市東幼稚園）・・・10/29
- (9) 2019全国国公立幼稚園・こども園ウィーク・・・11/13～19
- (10) 高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会（幼保連携型認定こども園えだがわ）・・・11/7

県外会議

- (1) 全国国公立幼稚園・こども園長会・理事会・・・6/7・2/7
- (2) 全国国公立幼稚園・こども園長会・都道府県会長会・・・11/22
- (3) 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会・理事会・・・6/1・11/9

全国大会

- (1) 第70回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会熊本大会・・・6/7・6/8
- (2) 第66回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会 三重大会・・・7/26・7/27
- (3) 第57回全国国公立幼稚園・こども園P T A全国大会 茨城大会・・・8/9・8/10

令和元年度役員名簿

役 職 名	氏 名 (所 属)
会 長	西村 芳美 (幼保連携型認定こども園にじいろ園・さくらんぼ園)
副 会 長	西村 玉子 (幼保連携型認定こども園栲原こども園)
副 会 長	上田 佳代 (高知市立かがみ幼稚園)
副 会 長	古味 美和 (香南市立野市幼稚園)
監 事	横田純美代 (香南市立野市東幼稚園)
監 事	山中 三重 (幼保連携型認定こども園ごほく)
東 部 支 部 長 (理 事)	隅田美予子 (幼保連携型認定こども園安田さくら園)
高 知 支 部 長 (理 事)	中山 美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)
中 部 支 部 長 (理 事)	西田 佳代 (いの町立伊野幼稚園)
高 岡 支 部 長 (理 事)	須内 富 (越知町立越知幼稚園)
研 究 部 長 (理 事)	中山 美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)
副部長・東部支部	松田 都 (芸西村立芸西幼稚園)
副部長・中部支部	中村 美香 (南国市立たちばな幼稚園)
副部長・高岡支部	福井めぐみ (幼保連携型認定こども園さくらんぼ園)
主任等部会 部 長 (理 事)	明神 香奈 (幼保連携型認定こども園にじいろ園)
“ 副部長	有岡 公 (幼保連携型認定こども園安田さくら園)
“ 副部長	小泉 清人 (幼保連携型認定こども園ごほく)
事 務 局	竹村 美恵 (南国市立たちばな幼稚園)
顧 問	岡村 昭夫 ・ 山中千枝子 ・ 玉瀬 友美 鍋島 亨子 ・ 岡村 美佐

令和元年度支部構成

支 部 名	幼稚園・こども園数	幼 稚 園 ・ こ ど も 園 名
東部支部	8園	(認)なはり 田野 (認)安田さくら園 芸西 夜須 香我美 野市東 野市
高知支部	1園	附属
中部支部	5園	(認)えだがわ 伊野 (認)ごほく かがみ たちばな
高岡支部	5園	越知 (認)にじいろ園 (認)さくらんぼ園 (認)栲原こども園 (認)たのの

令和元年度研究推進委員・研究員名

支 部 名	推進委員	研 究 員
東部支部	内田 優	内田 優 ・ 伊吹 真弥 ・ 松尾 浩一 ・ 小松 由紀 森安 智子 ・ 小松友香里 ・ 和田 萌子 ・ 志磨村萌菜
高知支部	鎌倉 正子	
中部支部	橋本 鈴子	中村 美香 ・ 岩塚 紀子 ・ 三宮亜由美 ・ 高野 梨香
高岡支部	西内 郁子	福井めぐみ ・ 中山 未都 ・ 中越 早紀 ・ 林 千佳

Ⅱ 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会園長部会事業報告

1 園長等部会

- (1) 高知県国公立幼稚園・こども園会総会・研究大会 園長等部会
 日時 令和元年5月18日(土) 14:10~16:00
 会場 高知県教育センター
 議題 (1) 令和元年度事業計画及び予算案について
 (2) 研修について
 (3) その他
- (2) 第1回高知県国公立幼稚園・こども園会園長等部会
 日時 令和元年7月22日(月) 13:00~17:00
 会場 高知大学教育学部附属幼稚園
 議題 (1) 四国役員会報告(徳島)
 (2) 全国国公立幼稚園・こども園長報告(熊本)
 (3) 会長、副会長、事務局、各部等の役割確認、今後について
 (4) その他(8月25日研修会打合せ)
- (3) 第2回高知県国公立幼稚園・こども園会園長等部会 夏季研修会
 日時 令和元年8月25日(日) 13:30~17:00
 会場 高知大学教育学部附属幼稚園
 内容 各園の情報交換 13:30~14:40
 講演 15:00~17:00
 “幼児理解に基づいた教育・保育の在り方、園経営について”
 講師 文部科学省初等中等教育局 視学官 湯川 秀樹 先生
- (4) 第3回 高知県国公立幼稚園・こども園会園長等部会
 日時 令和2年1月16日(木) 15:00~17:00
 場所 南国市立たちばな幼稚園
 議題 (1) 会務報告
 (2) 認定こども園えだがわの教育研究会について
 (3) 年度末の計画予定(理事会・評議員会)
 (4) 来年度の組織体制について
 (5) 各園の動向
 (6) その他

2 研究会・研修会への参加・他

- | | | |
|------------------------------|-----------------|----------|
| ① 全国国公立幼稚園・こども園長会 | 第1回理事会(熊本) | 6/7 |
| 〃 | 第2回理事会(東京都) | 2/7 |
| ② 第70回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会 | 熊本大会 | 6/7・8 |
| ③ 第66回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会 | 三重大会 | 7/26・27 |
| ④ 全国国公立幼稚園・こども園ウィークへの取り組み実施 | | 11/13~19 |
| ⑤ 全国国公立幼稚園・こども園長会都道府県会長会 | | 11/22 |
| ⑥ 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会(徳島県) | 第1回理事会 | 6/1 |
| | 第2回理事会 | 11/9 |
| ⑦ 高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会 | 幼保連携型認定こども園えだがわ | 11/7 |
| ⑧ 高知県国公立幼稚園・こども園PTA研究大会 | 香南市立野市東幼稚園 | 10/29 |

Ⅲ 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会主任等部会事業報告

1 令和元年度主任等部会総会

日時 令和元年5月18日（土） 15：00～15：50

会場 高知県教育センター

- 議題
- ・平成30年度事業報告及び決算報告
 - ・役員改選
 - ・令和元年度事業計画及び予算案について

2 研修会

(1) 第1回研修会

日時 令和元年8月22日（木） 10：00～13：00

会場 ちより街テラス 3階 第1会議室

内容 講話「主任・教頭・副園長としての役割や在り方」

講師 高知県幼保支援アドバイザー 田村 眞知 先生

(2) 第2回研修会

日時 令和元年11月20日（水） 9：30～12：00

会場 越知町立越知幼稚園

内容 研修テーマ「保育を見る目を高め合おう」

- ・保育参観（5歳児クラス）
- ・研究協議

(3) 第3回研修会

日時 令和2年2月12日（水） 15：00～16：00

会場 ちより街テラス 3階 第4会議室

内容 情報交換会 ・各園の取り組み報告

(4) 研究会への参加

- 高知県国公立幼稚園・こども園PTA研究大会

日時 令和元年10月29日（火）

会場 香南市立野市東幼稚園・夜須中央公民館

- 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会

日時 令和元年11月7日（木）

会場 いの町立幼保連携型認定こども園えだがわ・伊野公民館

3 企画委員会

第1回企画委員会

日時 令和元年5月7日（火） 16：00～17：00

会場 ちより街テラス 3階 第5会議室

内容 ・平成30年度のまとめ ・令和元年度の事業計画など

第2回企画委員会

日時 令和2年2月12日（水） 16：00～16：30

会場 ちより街テラス 3階 第4会議室

内容 ・令和元年度のまとめ ・令和2年度に向けて（新役員について）

IV 令和元年度高知県国公立幼稚園・こども園会 研究部

1. 研究主題と研究方針

本年度から、研究主題を「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して）」として、各支部で研究を始めた。幼稚園教育要領等の改訂により、幼保小接続を促進するために示された幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を具体的な幼児の姿を通して理解し、小学校教員はもとより保護者や地域の関係者に説明し、幼児期の教育の重要性とその在り方についての理解を促進することが求められている。そのため、本研究主題に基づく各支部の研究は、新幼稚園教育要領等への理解を深めるとともに、幼児教育の実践についての説明力向上に必要なものである。

各支部においては、研究員を中心にこれまでの研究の進め方及びまとめ方を再考し、より研究を深めることができる手法等を工夫して取り組んでいる。本資料から、各支部の研究の進め方やまとめ方を互いに学び、次年度の研究につなげてほしい。

2. 研究経過

実施日	会 場	内 容
4月24日	高知大学教育学部 附属幼稚園	評議員会 「平成30年度幼児教育のあゆみ」を各園に配付
5月18日	高 知 県 教 育 セ ン タ ー	第1回研究推進委員会 研究計画・研究テーマについて 国公立幼稚園・こども園研究大会の進め方について
6月5日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	第2回研究推進委員会 保育、指導案について
6月13日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	中部支部研 保育、指導案について
9月12日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	中部支部研 保育、指導案について
11月7日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	第3回研究推進委員会 高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会
12月25日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第4回研究推進委員会 各支部の研究資料の報告と協議
3月11日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第5回研究推進委員会 各支部の研究資料の検討 「幼児教育のあゆみ」のまとめ 令和2年度の研究テーマについて・元年度反省

3. 各支部の研究の取り組み

12ページからの各支部の研究報告

4. 研究の概要

東部支部は、保育提供園の実態からサブテーマを設定して研究を進めている。研究を始めるにあたって、サブテーマの「夢中になって遊ぶ姿」について出された意見を図を用いて整理し、支部全園で共有しており、各園の研究や実践につなげる工夫が見られる。研究のまとめでは、事例の抽出理由が述べられており、何のためにエピソード記録を用いてまとめているのかを明確にし、目的に沿ったまとめ方を工夫している。また、複数の場面を通して分析的に見ること、まとめることが行われており、研究内容をまとめる作業を通して研究がさらに深まっていることがわかる。

中部支部は、本年度11月の教育研究会の当番支部として研究の中心を担っていただいた。東部支部同様、保育提供園の実態と願いを大切に研究を進めている。3回にも及ぶ研究保育では、毎回研究主題に迫る協議方法を工夫するとともに、協議等で得られた成果と課題を次の研究保育へつなぎ、実施園の取り組みを支えてきた。そのことが、研究のまとめにも見て取れる。幼児期の教育は、幼児一人一人へ向けられた温かなまなざしと、幼児の様々な姿を肯定的に捉えようとする教師の姿勢に支えられている。研究のまとめの中にもそうした教師の姿勢が感じ取られ、保育提供園への労いと感謝を読み取ることができる。多くの学びを様々な手法を用いて研究保育を一緒にできなかった各支部の仲間にも分かるようにと、まとめたその工夫も見してほしい。

高知支部では、これまでの研究の成果と課題から子どもの内面理解に視点を当て、写真や動画を用いて幼児の内面を理解し、研究主題に迫っている。また、研究のまとめでは協議内容の記録を用いながら、教師の幼児理解の傾向から根拠となる子どもの姿を語り合う難しさを指摘している。そして、写真や動画の協議内容では、場面の切り取りの難しさとその重要性にもふれている。これらの課題は、決して個人の力量にのみ起因するものではなく、協議をつくっている参加者全員によるものである。さらに、事前準備による短時間協議の可能性は、協議時間を確保することが難しい今日の幼稚園現場における課題にどう向き合い、保育の質向上に向けた取組を行っていくのかの可能性を示唆するものである。

高岡支部では、幼児が主体的に生活する姿に着目しながら研究を進めている。4歳児の研究保育では、4歳児らしい幼児の姿を捉えていきながら5歳児の協同性へとつながる育ちを明らかにしている。また、環境構成と教師の援助のよさと課題の根拠を示すとともに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とのつながりを明確にしている。5歳児の研究保育では、新たなまとめ方で幼児の姿と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とのつながりを示すとともに、翌日の遊びの様子から研究保育での学びが翌日以降の保育にどのようにつながっているかを問うている。この新たな挑戦は、研究保育のもち方をも問うことになる。

このように、令和元年度、各支部で研究主題「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためにはどのような環境の構成や教師のかかわりが必要か（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して）」について研究を深めてきた。今年度より新たな視点とした「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5領域を通じた保育の積み重ねの先にある。また、幼児をどのように理解したのかで環境構成や援助の振り返り方も異なってくる。

令和2年度は、研究主題を「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解を基にして）」として、保育の基本である5領域を大切にしながら幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を見つめてみたい。また、幼児理解の在り方そのものへも迫っていきながら、研究を進めていきたい。そして、研究を通して各園の教育・保育の質の向上につなげていきたい。

2019年度高知県国公立幼稚園・こども園会総会
研究大会

子どものほめ方・叱り方
—子育てに応用できる心理学—

高知大学
玉瀬友美

今日のお話の流れ

1. 1～5歳児の特徴とほめ方・叱り方
2. 「ほめること」と「叱ること」
3. 体罰について
4. 親の「気持ち」と「行動」

1. 1～5歳児の特徴とほめ方・叱り方

1歳児の特徴

- ・初語、独歩
- ・自分の意思で移動できるようになる
- ・探索欲求「なんでも触りたい」
- ・行動調節は十分できない
- ・大人言葉はまだ理解できない
- ・わざと大人を困らせることはない
- ・大人感情には敏感

2020/3/31

3

ほめ方・叱り方のポイント

1. 叱らずにすむ環境づくり
2. 子どもの行動の先を読む
3. すぐにその場でほめる・叱る
4. くり返し教える
5. 「少し感情をこめる」のは効果的

2020/3/31

4

2歳児の特徴

- ・イメージする力がつく
- ・なんでも自分でやりたがる

2020/3/31

5

ほめ方・叱り方のポイント

1. 感情的にならず穏やかに話す
2. 心と行動を分ける
3. 望ましくない行動にはご褒美を与えない

2020/3/31

6

3歳児の特徴

- ・言葉がだいたい通じる
- ・過去・現在・未来という感覚も大雑把にわかるようになってくる
- ・友だちと遊びたい
- ・少しずつガマンができるようになる
(自己抑制)

2020/3/31

7

ほめ方・叱り方のポイント

1. 望ましい行動を増やす(望ましくない行動が減る)
2. 「叱る」+「前向きメッセージ」(何をすればいいのか教える)
3. 「なぜそんな行動をするのか」を考える

2020/3/31

8

4歳児の特徴

- ・大人のいうことがほぼ理解できる
- ・感情が発達し、喜怒哀楽がはっきりしてくる。
- ・友だちと仲良く遊べる(ケンカも増える)
- ・生意気な態度やへ理屈が増える
- ・明らかに嘘とわかる嘘をつく
- ・人のまねをしたりタブー語をよく発する

○ 2020/3/31

9

ほめ方・叱り方のポイント

1. へ理屈や生意気な態度に「巻き込まれない」
2. 叱ったつもりがごほうびになっていることも
3. ほめ方はいろいろ

2020/3/31

10

5歳児の特徴

- ・人の気持ちを考えることができるようになる。
- ・自分と他児の違いがわかり比べることができる。
- ・ルールを守る。
- ・約束を守る。

2020/3/31

11

2. 「ほめること」と「叱ること」

ほめる・・・「その行動は正しい」情報を与える
あなたはそれができる存在だ
承認

叱る・・・「その行動は誤りだ」情報を与える
「どの行動が正しいか」情報を与えない

2020/3/31

12

3. 体罰について

6つの問題

親はどう接すればいいか

- ・「自分は怒っている」と正直に認める
→感情に支配されなくなる。
- ・「わたしメッセージ」を子どもに与える

2020/3/31

13

4. 親の「気持ち」と「行動」

親の気持ちを子どもに言葉で伝える

「わたしメッセージ」を送る

「ほめる・叱る」が効果的であるかどうかは、与えるタイミング、頻度、与える者と与えられる者との人間関係が重要

2020/3/31

14

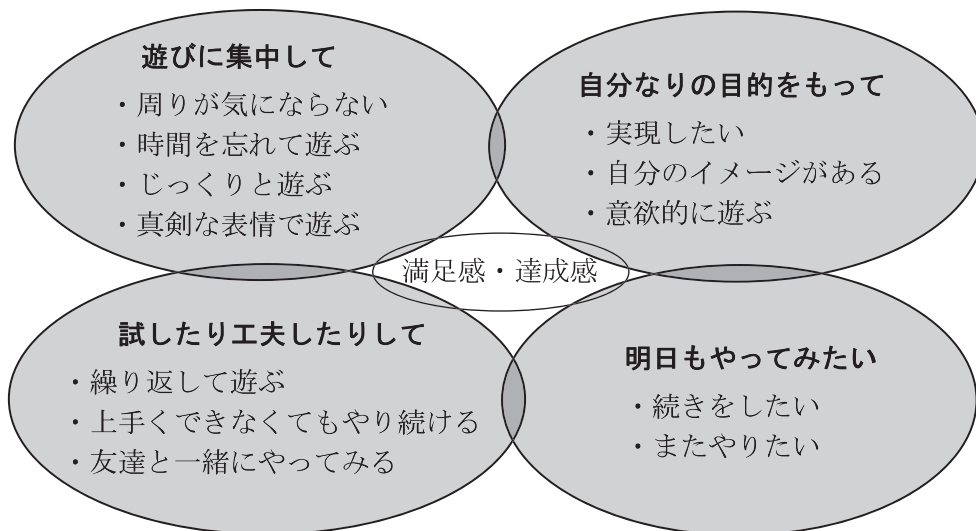
東部支部

研究主題 「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、
どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か
(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して)」
～ 夢中になって遊ぶなかで、自尊感情を育むためには ～

1. 研究にあたって

昨年度は、幼児一人一人の育ちをしっかりと捉えて援助していくことや、互いの姿や遊びが見合える環境を作っていくことで、幼児がよさを発揮し、互いを認め合う姿につながっていくことを学んだ。今年度は、保育を公開する香南市立夜須幼稚園の課題として、遊びに意欲的に関わろうとする幼児がいる一方で、思いが通らない時に物にあたってしまう幼児や、相手の言い方に押されて思いを出しにくい幼児や自信がない幼児もいるという実態があった。そこで、幼児が夢中になって遊ぶなかで、自信をもって生活や遊びに取り組み、葛藤を味わい、友達とよさを認め合えるような姿を育てていきたいという願いからサブテーマを～夢中になって遊ぶなかで、自尊感情を育むためには～として研究を進めていくことにした。そして、夢中になって遊ぶとはどのような姿かを各園で話し合い、出た意見を図1のようにまとめ、東部支部各園で共有しながら研究を進めていくことにした。また、公開保育での協議やエピソードを通して、幼児の姿を多面的に見ながら今の育ちをどのように読み取っていくのか、さらに幼児期の終わりまでに育って欲しい姿につながっていく教師の関わりや環境の構成についても話し合いながら研究を深めていきたいと考えた。

【図1】〈夢中になって遊ぶ姿の共有〉



2. 研究の進め方

- 東部支部8園で各1名の研究員を中心に研究を進める。
- 香南市立夜須幼稚園の5歳児の研究保育を通して、夢中になって遊ぶ姿につながる場面を共有しながら幼児の捉え方について考える。
- ビデオやボイスレコーダーを使って夢中になって遊んでいる場面の教師の関わりや幼児の姿などをエピソード

として書き起こし、支部で共有しながら教師の関わりや環境の構成について検討する。

○夏季研修会を実施し、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿に着目し、これからの育ちや援助について検討する。

3. 研究経過

実施日	会 場	内 容
4月3日	田野町ふれあいセンター	支部総会及び研究会 (役員選出・研究の方向について・部会別協議・研究会)
5月7日	香南市立夜須幼稚園	第1回研究会 (研究主題の共通理解・支部サブテーマについて 研究計画・夏季研修について)
5月18日	高知県教育センター	第1回研究推進委員会(研究の進め方・分散会役割について)
6月5日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	第2回研究推進委員会 (保育参観・研究協議・支部研究の進め方について)
6月10日	香南市立夜須幼稚園	第2回研究会(東部支部研究会に向けての事前検討会)
6月12日	香南市立夜須幼稚園	東部支部研究会 研究保育・研究協議(5歳児) 講師:高知県幼保支援アドバイザー 宮崎 順子 先生
7月8日	香南市立夜須幼稚園	第3回研究会(東部支部研究会での協議内容の決定 ・夏季研修会での役割分担について)
7月22日	芸西村立芸西幼稚園	第4回研究会(東部支部研究会のエピソード考察検討会 ・夏季研修会について)
7月26日	香南市立野市幼稚園	夏季研修会(研究経過の報告 ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して研究協議) 講話・実技演習:『幼児期の運動遊び』 講師:独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立室戸青少年自然の家 谷岡 守 先生 田中 剛 先生
9月9日	芸西村立芸西幼稚園	第5回研究会(夏季研修会の協議の反省・まとめに向けて)
11月7日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会(保育参観・研究協議) 第3回研究推進委員会(研究協議の進め方について)
11月18日	香南市立夜須幼稚園	第6回研究会(事例検討・研究のまとめに向けて)
12月25日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第4回研究推進委員会 (「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について)
1月10日	芸西村立芸西幼稚園	第7回研究会(推進委員会を受けて研究のまとめの再検討会)
3月11日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第5回研究推進委員会(「幼児教育のあゆみ」のまとめについて)

4. 研究内容

6月12日(水) 香南市立夜須幼稚園 5歳児つき組 男児4名 女児14名 計18名

本日のねらい◎と内容○

- ◎自分なりに試したり考えたり工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう。
- 泥や砂、水などを使ってチョコレートなどを作ったり、ごちそうに見立てたりして遊ぶ。
- 色々な素材を選んでお風呂屋さんなどに必要なものを作って遊ぶ。
- 樋やパイプを使って重ねたり高低差をつけたりして水を流して遊ぶ。
- ◎作ったものを使って見立てたり、友達とやりとりしたりしながら遊ぶ楽しさを味わう。
- ケーキにクリームをのせたり、葉っぱでデコレーションしたりして遊ぶ。
- お風呂屋さんごっこで、お店の人やお客さんになってやりとりをする。
- 自分が考えたり気付いたりしたことを友達や教師に伝えながら遊ぶ。

〈協議の視点〉

- ・幼児がどこでどのように夢中になって遊んでいたか。その中で学びや育とうとしているところはどこであったか。
- ・どのような援助や環境の構成が夢中になって遊ぶ姿につながったか。
- ・本日のねらいと内容を振り返りながら明日の保育につなげるためにはどのような援助や環境の構成が必要か。

〈エピソード1：砂場でのプール作り〉

* 研究協議であげられた夢中になって遊んでいる場面より、普段人との関わりや遊びのなかで幼さが見られているA男やB男が、教師と一緒に自分達のやりたいことに向かって遊び始めたこと、また本日のねらいを振り返るなかで学びがあったことからこの場面を選び考察を行った。

A男、B男、C男と年中児のD男が砂場で穴を掘っているところに教師が来ると、A男が「プール作るが、先生も一緒にしよう」と教師を誘い一緒に穴を掘り始めた。

少し掘るとA男が「流しますよ」と言って、バケツに汲んでいた水を1本の樋から流した。教師が樋の先できている穴を指さし「あそこは何?」と聞くと、A男は「プール、小学校の」と答えた。そこで教師はA男がイメージする小学校のプールに近づくのではないかと思い「ちょっとここ、広くしてみる?」と言うと、教師への返事はなかったが、A男は「C男、早く」とC男を誘ったり、「先生、何かこれすごい面白い」と教師に伝えて穴を掘ったりした。年中児のD男が「ここ、お風呂みたいやね、もっと広いの作ろう」と言ったことで、4人で穴を広げることになった。

B男は、C男が掘っている近くで「ここやる?」と確認しながら手で穴を掘っていた。この姿を大切にした

【幼児の経験していたことから

教師のかかわりと環境構成を考える】

◆この時に経験していたこと

(~~~~~ = 夢中になって遊ぶ姿【図1】より)

- ・同じ場にいる友達や教師と一緒に作ることを楽しんでいた。
- ・小学校のプールに行ったことのある年長児や、行ったことのない年中児がそれぞれの経験から小学校のプールやお風呂をイメージしていた。
- ・自分が気付いたことを教師や友達に伝えることを楽しんでいた。

いと思い、教師はB男に①「B男くん、いいこと考えたやん」「ここ、繋げてくれないとやせんかった？ここ繋げたら、C男くんのとつながるね」と伝えた。B男は「うん」と答え、それを聞いていたD男も「つながるでね」と答えた。B男とC男が掘っていくと穴が繋がり、B男は「こっちにもきゆう」と水が流れてくる様子を見て嬉しそうな声で言った。

B男、C男、D男が同じ穴の中で別々の方向を向き前かがみになりながら、穴を掘り出した。B男はずっと手で砂をつかん



では出すことを繰り返していたが、砂がすぐに崩れてきていた。その様子を見て教師は、実際に作ってモデルを示すことでプール作りが実現していくのではないかと思い、「先生、壁にしてみよう」と、B男の前で穴の内側を手のひらで固めて見せると、②B男は「早くこんかなあ」とつぶやいた。教師が「何が？」と聞くと「お水」と答えたが、教師は広げること意識が向いていたため、「まだ広がってないで」と伝えた。それを聞いたB男は「ここ砂いっぱい」と言って砂をすくい出したので、③教師は「ここにトントントントン」と、砂壁にするようにもう一度B男の前でやって見せた。するとB男やC男も教師と同じようにして、壁を作りだすと砂が固まってきた。そのとき、D男がバケツに入れてきた水を樋から一気に流した。④B男は出てきた水を見て「きた、きたー」と笑顔で言った。

- B男は「こっちにもきゆう」と水の流れを見て言っていることから、穴がつながって水が流れたことを楽しんでた。
- 自分なりのやり方で穴を掘ることを楽しんでた。
- 教師の言葉や姿から同じようにやってみようとしていた。

◆教師の関わりと環境の構成

(教師の関わり)

- 教師は下線部①でのB男の姿を友達に思いを伝える姿と捉えて、B男とC男の関わりの機会を大切にしたいと思い、B男の思いを汲み取りながら言葉をかけていた。
- 下線部③でやり方を工夫する姿があまりなかったので、B男の育ちを考えた時に声かけだけでは難しいと考え、すぐに崩れてしまう砂が固まり、プールみたいにするという思いが実現できるようにモデルを示しながら言葉にした。

(環境の構成)

- 前日の遊びから、自分で選ぶことができるように樋やバケツ、スコップなどを砂場の前に用意していた。

◆幼児がこの時に経験していたことや、本日のねらいを振り返って教師の関わりと環境の構成について検討していくと

- 本日の内容の中に、“樋やパイプを使って重ねたり、高低差をつけたりして水を流して遊ぶ”とあるが、この日の幼児の姿を見ると友達や教師と一緒に自分達なりにイメージしたプールを作ることを楽しんでた。また教師が遊びの場に入ることによって幼児それぞれのイメージを言葉にしたり、作り方を知り自分なりに試す姿が見られたりしていた。また、友達とのやりとりをする楽しさにつなげていくためにも「友達と」だけではなく「教師や友達と一緒に」ということも今の学級の育ちや時期を考えると大事だったのではないだろうか。
- 友達とやりとりをする楽しさにつなげるためには、C男がB男の言葉に対して答えたり一緒に考えたりする関

わりが生まれるように教師がB男の言葉を繰り返したり、「B男がこうやって言っているけど、C男はどうしたらいいと思う？」など聞き出したりすることが、大切であったのではないだろうか。

- B男の言葉や姿から下線部②や下線部④のように水を流すことにもB男なりの目的をもっていただと思われる。思いを汲み取ると同時に、この日のねらいにある“自分なりに試したり工夫したりしながら遊ぶ楽しさを感じられるよう”に、B男の「お水」という言葉に対して問いかけ、B男の実現したいことは何か捉え直していく必要があったのではないか。教師の思いやねらいと幼児の思いのずれを意識しながら保育にあたることが必要だと思われる。
- 幼児が、水が流れることを楽しんだり、幼児の穴を掘りたい、広げたいという思いが実現できたりするように、教師がスコップなどの用途に合った道具の選択ができることに気付かせたり、一緒に準備したりしていくことが、必要ではないだろうか。

<エピソード2：赤土山でのチョコレート作り>

* 赤土を使って本物のようなトロトロのチョコレートを作りたいという思いや友達の存在に支えられながら自分なりに試したり工夫したりする姿が見られたこと、長時間じっくりと夢中になって遊ぶ姿が見られたことからこの場面を選び、幼児期の終わりまでに育てほしい姿に着目して考察を行った。

E子は、赤土山横のテントで前日からチョコレートに見立てて作っていた赤土と水が入ったボウルにサラ粉を入れたり、泡立て器やお玉で混ぜたりしていた。教師が同じテントで赤土と水を泡立て器で混ぜていたF子に「F子はどんなの作りたいの？」と聞くと、F子は「E子みたいなのが作りたいが」と答えた。教師が「そっか〜、E子ちゃんみたいに作りたいがやね、E子ちゃんは、サラ粉とか入れてたけどなあ」と声をかけF子の反応を待ったが、F子は混ぜながらE子のやっている手元を見て動かなかった。周りに参観者が多数いたことで、少し緊張している様子もあったので、教師は赤土山からF子が使っていたザルに赤土を入れてきてF子の所に行き「土足りてる？」と尋ねた。F子は首を横に振ったが、教師はF子が自分の言葉で伝えられるように「何が足らん？」と声をかけた。するとF子が教師と目を合わせ、にっと笑いながら赤土の入ったザルを人差し指でトントンと叩き、教師が笑顔で頷くとサラ粉を作ろうとザルを手を取った。

その後、F子は赤土を入れたザルを振り始めていた。しかし、前日の雨で赤土が湿っていたためザルを振り続けてもボウルの中にサラ粉が落ちなかった。F子はサラ粉ができていないか、ボウルの中の様子を確認しながら作っていたが、できていないことに気付き、ザルに入っていた赤土を捨て今度は自分で赤土山に赤土を取りに行き、チョコレート作りを始めた。



その様子をしばらく見ていたG子も、F子と対面になる場所にボウルやザルを用意して、赤土を「重いがよね〜」と言いながらしばらくザルで振るっていた。振るっていてもサラ粉ができていないことに気付いたG子は「これならできるかな」とつぶやきながらお玉や泡立て器を使ってザルの中の赤土をかき混ぜた。すると少しだが赤土がバケツの中に落ちたことに気付き、今度は手でかき混ぜた。その後、E子、F子、G子は赤土でチョコレート作りを続けていた。G子はF子の作っている物を見て「F子すごいね」とつぶやいた。その声を聞いたF子は「どんなにしたいが？」とG子に尋ねた。するとG子はF子のボウルを指さし「こんなにしたいが」と答えた。F子はG子の言葉を聞いた時、泡立て器で自分のチョコレ

トを混ぜていた手が止まりG子を見ながら口角があがった。その後、F子は自分のボウルの中からお玉一杯分のチョコレートをG子のボウルに分けた。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して、これからの育ちと大切にしたい環境の構成と教師の関わりについて考える】

◆この時に経験していたこと (~~~~~ =夢中になって遊ぶ姿【図1】より)	◆幼児期の終わりまでに育って欲しい姿に着目して考えると (※ 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿)
・友達のしていることに興味をもち、刺激を受けて <u>同じものを作りたいという思いをもちながら試行錯誤</u> している。	→※ 思考力の芽生え 言葉による伝え合い
・友達に尋ねたり、 <u>自分なりに相手の思いを</u> 考えたりしている。	→※ 言葉による伝え合い
・湿っている赤土や、湿っていない赤土の性質に気付いている。	→※ 自然との関わり 思考力の芽生え
・湿っている赤土をこすために、お玉や泡だて器など道具の <u>使い方を</u> 考えたり試したりしている。	→※ 健康な心と体 自立心 思考力の芽生え
・F子は「F子のようにしたい」と言われ嬉しさを感じている。	→※ 社会生活との関わり 言葉による伝え合い

◆この経験につながった要因

- ・同じようにしたいと思える友達の存在が、長い時間遊びを続ける姿につながったのではないだろうか。
- ・前日からのチョコレート作りを保障するために同じ場所にテントを用意したことで、自分なりの目的を実現しようと取り組む姿につながったのではないかと。また3、4人が向かい合い、つぶやきが聞こえる広さのテーブルだったことで、友達のやり方が見えたり友達の思いを感じたりする姿につながったのではないだろうか。
- ・じっくりと取り組むことができる時間や、近くにお玉や泡だて器など自分で選べるように用意したことが、本物のようなトロトロのチョコレートにしたという思いを実現するために試す姿につながったのではないだろうか。



◆これからの育ちとして

- ・“同じ物を作りたい”という思いをもつことで、友達と思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向かっていく **協同性** が育っていくのではないだろうか。
- ・本物のようなチョコレートを作りたいという目的をもって遊ぶことで、今までの経験を生かし、試したり、考えたりしていくことが **思考力の芽生え** につながっていくのではないだろうか。また、自分のやり方を周りの

友達に伝えるという「言葉による伝え合い」にもつながっていくのではないだろうか。

- ・自分なりにやっていることを友達に認めてもらうことで、あきらめずにやり遂げようとする「自立心」や互いの思いを出し合う「言葉による伝え合い」につながっていくのではないだろうか。

◆教師の関わりや環境の構成としてこれから大切にしていくこと

- ・それぞれが自分の思いをもっているので、その思いを実現していくためにどうすればいいのかを幼児と一緒に考え、環境を整える。例えば、雨上がりにサラ粉が使いたい時にはどうするのかを考える。本物のようにするために必要な道具を考えるなどの教師の関わりと環境の構成が求められる。
- ・周りの友達から認められる機会が増え、思いを実現したという願いをもって試行錯誤する姿につなげていくために、幼児同士のやりとりを大切にしながら、一人一人の気付きをさりげなく伝える。そのことが、自尊感情を育む事にもつながっていくのではないだろうか。
- ・テントのように前日からの遊びが保障される場を用意したことで、繰り返し試す姿が見られたので、遊びの続きができる場や時間を保障していくことを今後も大切にする。

5. まとめと今後の課題

今年度は、サブテーマを「夢中になって遊ぶなかで、自尊感情を育むためには」として研究を進めてきた。

エピソード1では、教師の意図と実際の幼児の姿を通してねらいを振り返り、様々な意見を出し合うなかで、教師の意図と客観的に見た幼児の思いとのずれが見えてきた。日々の保育のなかでは教師が主観的に幼児を捉えて援助していくこともあるが、幼児の思いと教師の意図を絡めながら援助していくためには、日々の保育で幼児がどのような経験をしていたのか、それはどこから読み取れるのかなど根拠をもとに検討していきながら振り返る必要性を学んだ。エピソード2では、幼児の経験していることが幼児期の終わりまでに育ってほしい姿にどのようなつながっていくのかを具体的な姿を通して考えることができた。前日と同じ遊びをしているようでも楽しんでいることが違ったり、新たな発見があったり、遊びが展開されていくので、教師はそれに合わせて環境を再構成したり、援助を変えたり柔軟に子どもと関わっていく大切さを感じた。

幼児の姿を細かく捉え、興味を示していることに寄り添い、一緒に必要な物を考えたり準備をしたりしていくことで、夜須幼稚園の幼児の変容として、さらに遊びへの意欲がわいてきたり、したいことにじっくりと取り組もうとする姿が見られるようになってきた。まだ物に当たってしまったという姿は見られるが、教師が幼児の姿を肯定的に捉えて言葉をかけたり、周りの幼児にも友達のよさを知らせたりすることを意識してきたことで、認められる喜びを感じ、相手にも思いやりのある言葉をかけたりする姿が見られるようになってきている。

今後も多面的に幼児の姿を捉える機会をもちながら、幼児の思いや姿を正確に捉える方法を探っていきたい。また、経験していることからこれからの育ちを見通し、それぞれの育ちにふさわしい遊びなどの教材研究をしながら幼児期にふさわしい生活を送ることができるようしていきたい。

高知支部

研究主題 「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、
どのような環境構成や教師のかかわりが必要か
(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して)」

1. 研究にあたって

昨年度の研究では、4歳児うさぎ組の事例を通して、自分の思いを友達に伝えるための教師のかかわりについて考察し、以下のことを学んだ。

- ・子ども一人一人の特性や発達段階などを把握し、『教師が子どものかわりに伝える』『教師も一緒に伝える』『子どもが思いを伝えている姿を見守る』などのかかわりが必要である。
- ・子どもが自分の思いを伝えることができた時に、『伝えてよかった』と思えるかかわりをするのが大切である。
- ・自分の思いを伝えるようになるためには、友達関係をどのように築いていくのかについても考えなくてはならない。

これまでの研究は、事例を記録し、研究推進委員が中心となって研究協議を行っていた。この事例の記録方法では、記憶によって書かれる部分が多く事実を正確に捉えにくく、幼児の内面理解にずれを生じることがあった。援助や環境構成を振り返ろうとしても内面の理解が適当でなければ、適切な援助や環境構成はできないことになる。

そこで、今年度の研究においては、保育の場面を切り取った写真や動画など客観的な事実を用いながら、幼児の内面を理解し、幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるための援助や環境構成のあり方について探っていきたい。また、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の視点から、必要な援助や環境構成を考えていきたい。

2. 研究の進め方

○3歳児クラスの保育の場面を切り取った写真からテーマに基づいて研究協議を行う。

◆研究1

子どもが遊んでいる場面を切り取った写真から、子どもが楽しんでいるところ、経験しているところなどについて協議を行い、子どもの内面を理解していく。この協議における発言を時系列にまとめて記載し、考察する。

◆研究2

子どもが遊んでいる場面を切り取った写真および動画から子どもの動作、つぶやきなどを記録し、子ども達が楽しんでいるところ、経験しているところなどを捉え、子どもの内面を理解し、テーマに基づいて協議を行う。また、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』(以下10の姿という)の視点から、必要な援助や環境構成を考える。

3. 研究経過

実施日	会 場	内 容
4月2日	高知大学教育学部 附属幼稚園	高知支部研究推進委員決定
5月18日	高知県教育センター	第1回 研究推進委員会 (研究の進め方・分散会役割について)
6月4日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第1回 高知支部事例検討会
6月5日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	高知県国公立幼稚園・こども園会 中部支部研究会 第2回 研究推進委員会 (研究保育・研究協議について)
11月7日	幼保連携型認定こども園 えだがわ	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会 (研究保育・研究報告・研究協議)
11月19日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第2回 高知支部事例検討会
12月18日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第3回 高知支部事例検討会
12月25日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第3回 研究推進委員会 (「幼児教育のあゆみ」のまとめについて)
3月4日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第4回 高知支部事例検討会
3月11日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第3回 研究推進委員会 (「幼児教育のあゆみ」のまとめについて)

4. 研究内容

研究1 砂遊びの写真を用いて幼児理解を図る（6月4日）

〈保護者に提示したドキュメンテーションより〉

参考

蒸し暑い一日。入園して日も浅い今の時期、砂場で水をたっぷり使って開放感を味わいながら遊ぶことで「あ～楽しかった」という満足感を味わい、明日も「幼稚園で遊びたいな」といった意欲にもつながるように、砂遊びに誘ってみました。

先生と一緒に掘った穴に、容器に汲んだ水を流し入れたり、水が溜まったところに足を浸けたりして、思い思いに砂と水に触れて遊んでいます。よく見ると、どの子も足元を見ながら、何度も



ゆっくり足を動かしたりしています。砂に流した水の動きや変化に不思議さを感じたり、溜まった水に足を浸けて感触を楽しんだり、この時期ならではの開放感を味わう遊びを体験できました。



写真②

G男くんが「かくれんぼ…」とつぶやきながら銀色のコップに水を汲んでいました。次の行動は、と見ていると、砂場にしゃがみこんで、カップの水をそっと砂の上に流したかと思うと、今度は水がしみ込んだ砂の上に、両手で砂をかぶせていました。「かくれんぼ」のイメージと、砂の中に水を隠す遊びとが重なって『なるほどな』と思いました。なんてすてきな感性と表現でしょう。

水や砂の性質に気付き、それをいかして遊ぶまでは、まだまだのもも組ですが、砂や水に触れて遊ぶ面白さのその先は、きっとさらに楽しい遊びになっていくことでしょう。

このドキュメンテーション作成前に、以下のような協議を行った。

協議内容 (Aは写真を撮影した3歳児クラスの担任教師、B、C、Dは管理職・他教員)

- ・波線部 (~~~~) …教師が子どもの気持ちをどのように理解しているか、なぜそう思ったのかという質問
- ・破線 (----) …A担任教師による返答
- ・一重線 (——) …重要な意見

一写真①を中心として

A：教師の心が動かされた場面の写真である。暑くなってきたこの時期に大事にしたい砂と水を使った遊びである。写真①は教師が子どもと一緒に砂場に穴を掘って水を溜め、そこに足を浸けて遊んでいる場面だ。みんな足元を見ているのが不思議で、どうしてなのかみんなに考えてもらいたいと思い選んだ。写真②はG男が「かくれんぼ」と言いながらコップに水を汲んで、そのあと砂の上に水を流し、流した上に砂をかけていた場面である。この感性が素敵だなと思いこの写真を選んだ。

B：子ども達は何を見て、何を楽しんでいるのだろうか？

A：子ども達は足元を見て、ゆっくり足を動かしていた。足を動かすことで砂交じり水の感覚、感触が楽しいのではないだろうか。

B：楽しんでいるところは3人3様(写真①の女児3名)なのだろうか。

A：汚れることなど気にせず、いろいろな遊びをてらいなくしてみようとする子ども達なので、楽しんでいるところは同じであると思っている。3人とも表情も「わー」ではなく、じっくり味わっているように見えるので。

D：泥水で足が見えたり、消えたりするところが不思議なのではないだろうか。家の風呂では水は透明であることが多い。足が無くなったのが、「わあ、出てきた」と不思議がっているのではないだろうか。

A：そうかもしれないが、自分としては足の感触を確かめているような気がする。

B：足の感触を確かめていると思う理由は？感触であれば、足元を見なくても上を向いていても味わえる。

A：「わあー」と言う大きな喜びの表情ではなく、小さく「わあ」と言う小さな喜びの表情だったので…しかもそっと足を動かしていたので。

B：だとするとそっと足を動かす、目が下を向いているがポイントだと思う。

A：見えないけど思わず見て、感触と感覚を楽しんでいる。どうなっているんだろうとは思っていないだろうけど、気づきではないだろうか。

B：この写真だと、足元が見えていないので、感触や感覚を楽しんでいるのかどうか、判断することは難しい。

子どもの内面を推し量る写真を撮るのは難しい。解釈はしたいが事実をどれくらい集めているかで、解釈できるか否かが決まると思う。よくわからないところが多いと、『私の思うこの子像』になってしまうと思う。同じ場で同じ遊びをしていても学びは違う。楽しんでいるところが、「みんな同じでした」と言うと、おおざっぱにしか見ていないことになる。普段のその子どもをどう理解しているのかがないと、内面は理解できないのではないだろうか。

考察

写真①では、他教諭により、いろいろな角度からの質問や解釈が投げかけられているが、A教諭は『砂混じりの水の感覚、感触が楽しい』という自分の解釈は変えていない。しかし『砂混じりの水の感覚、感触が楽しい』と言える根拠の部分は想像であり、曖昧になっている。また、写真①の3人の女兒の楽しさの違いについても、担任教師は『同じではないか』と捉えていたが、その根拠については曖昧であった。写真①では子ども達の見線の先がはっきり撮影されておらず、幼児の気持ちを理解しにくいのが、そもそも担任教師がその時に子どもの事実や楽しさを正確に捉えていたのがこの協議により問われることとなった。

一写真②を中心として

- A：写真のE男は、たっぷりカップに水を汲んで、そっとした足取りで、カップを砂面に近づけてそっと水を流していたと思う。
- C：スコップが近くにあるのは穴を掘っていたのかな。
- A：そうじゃなかったと思う。
- B：水は何回かけていた？1回、2回？
- A：想像だが、何回かかけていたと思う。
- B：水を入れた後、砂はどんなにかけていた？
- A：両手でかぶせるように、そっとかけていた。
- C：そのあとは？
- A：すぐ別の遊びを始めていた。
- C：かかるとが浮いているから、力が入っているように思う。
- D：いつも、わあっと走っているイメージがあるG男がそっとやっているのは、遊びに魅力があったんだろう。
- B：かくれんぼは園でやったことがある？
- A：ない。姉がいるので家での経験があるかも。
- B：かくれんぼ＝見えなくなることがわかっている。そのイメージでこういうことをしている？
- A：そう解釈した。カップの底が砂地に接地しているので、ジャバツと流していない。
- B：3歳児のかくれんぼは、見えないところにきちんと隠れるのではなく、いないいないばあに近い遊び方。G男は何が楽しかったのだろうか？何度かやってみたってことは、繰り返したくなる楽しさがあったはず。
- A：しみこんでいくことがそもそも楽しかったのだろうか。しみこんでいくのがかくれんぼみたいと思ったのでは？
- B：それなら砂をかけなくてもよい。砂までかけたのはそうでもないのでは。
- A：私がG男の気持ちになると、しみこんだらかくれんぼみたいと思う。けれど色が違うからなお隠してみようと思ったのでは。
- B：それなら水が砂の中に入るのは隠れるってことにならないのでは。蓋をするように砂をかける行為が隠れる

という感じがする。しみるだけなら消えてなくなる。

A：どの段階で彼がかくれんぼと思ったのか、わからない。

B：A先生はG男になりきってと言っているように思うけれど、根拠になる姿が話に出てこないで、A先生の見方で言っているように思える。根拠がないと想像になってしまうのではないだろうか。保育を振り返るときに、何を楽しくていたんだろうに行きつかないと、ねらい・内容までいかない振り返り方になる。楽しいといふところをすくい上げながら保育は展開していかなければならない。その推し量りの精度を上げていきたい。

考察

協議を通して学んだ幼児理解のあり方

写真②においては、G男がなぜ、砂にカップの水をかける行為を「かくれんぼ」とイメージしたのか、様々な角度から質問が投げかけられている。なぜ「かくれんぼ」とイメージしたのか、担任なりに解釈を繰り返していたが、根拠となる事実は乏しく、想像の域を出ていないことも明らかにされた。

写真①②を通じた考察

写真①②の協議を通して、担任が自分なりの幼児理解にとらわれており、見方が固定化していること、また、根拠となる事実を正確に捉えていないことが、この協議を通して明らかとなった。下線部（ ）については、今回の考察に至る主要な意見である。どの姿を捉えて子どもの内面を理解したのか、楽しさはどこにあるのかわかっていないと、ねらいにつながる保育となっていないことも、協議を通しての大きな学びであった。

幼児理解が正確でないと、幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるための環境構成や援助を明らかにすることはできない。テーマを探っていくためにも幼児の内面を理解する力量を高めていく必要があることがわかった。

研究2 動画を通して幼児理解を図る

研究1やその他の園内研究を振り返り、写真に加えて保育場面の動画から、事実を正確に捉え、そこから幼児の内面を理解する協議を行うこととした。(写真は保育室のすぐ横にある夏場にプールとして使用している場所)

動画起こしより

9月弁当後の時間

H男とI男が『レース』と言って、積み木の平板をもも組プールに並べ始める。その姿を見て、J男、K男が参加し、積み木を並べ始める。するとH男とI男はJ男とK男に『レース』を作るように頼みだした。

動画①

1. I男：まだでしゅか？
2. H男：全部作って。
3. J男：はい（と積み木を運んでくる）。
4. H男：どんどん作れ。
5. I男（こっちは置くところじゃないと「こっちはです」と言いながら手でJ男を制止）
6. （I男 H男 プールのふちに腰を掛けて）
7. I男：もっと大きなの作ってください。



8. J男：こうやる？（横に置いた積み木を縦にして）
 9. H男：はい。
 10. H男：ちがう。全部作って。全部。
 11. I男：ぜんぶだよー。ぜんぶ。
 12. J男：そうです。
 13. K男：そうです。
 14. K男 J男（持っていた積み木を置く）
 - 15.（K男は慎重に運んだ三角の積み木を2つ、J男が置いた三角の隣に置く。）
 16. I男：まだかなあ、レース。
 17. H男：（教師に）そこすべるから気を付けて。
 18. I男：先生も気を付けて。
- J男：室内のままごとコーナーの衝立を軽々と運び、持ったままプール内にジャンプ。

動画②

しばらくしてH男もI男も、ままごとコーナーから衝立やテーブルを運び始める。

19. H男：（バッグを持ってプールを降りながら）おうちができた（と言ってテーブルの上で食べ物をひっくり返す）。
20. J男：（テーブルに手をつけてH男の様子を眺める）
21. I男：（ピンクの椅子を運びながら）いっぱいもってくるぞ（とプールの段差を上がっていき保育室へ）。
22. J男：おしっ（といて急ぎ足で保育室へ）。（K男も後に続く）
23. H男：（黄色い椅子をテーブル前に運び、おもむろに食材を投げて教師に注意される）
24. I男：（食べ物の入った木の箱ごと運んで教師と目が合うと「食べ物」とにっこり）



協議内容（Aは写真を撮影した3歳児クラスの教師、B、C、D、E、Fは管理職・他教員）

協議① 子どもの育ちを理解する

4人の子ども達が経験していること、楽しんでいること、芽生えている感情はどのようなものかについて、上記の動画を視聴後、各自が読み取ったことを意見交流した。

※付箋を用いて協議。『』内は付箋に記入した内容。

B：H男が実現しなかったのは『部屋の積み木を全部持ってきて、きっちり並べて、作ることに達成感を感じている』I男は『とにかく積み木を全部ここに持ってきて並べてもらいたい。その様子を見ていたい』^① ではないか。

A：『全部』と言うのはどこからそう思ったのか。

B：H男の言葉に『全部作って』が入っていたから。動画2で、ある物すべて子ども達が出しているのを見て余計そう思った。また、『積み木の平板を並べた時点で何だか車のレースのコーナーのように感じたから「レース」と言ったのではないか』。

C：下線①に対しては、意見が異なる。I男は『友達も真似て自分も言ったりやったりすることが楽しい。』のではないか。H男が会話の中で「全部」と言って、それを受けてI男が『全部』と言っている。H男のほうが

アイデアマンできっかけは彼にあって、I男はそれを受けて同じように復唱している。H男の言葉が助け舟になり、言いやすくなっている。H男が刺激となって自分も言えるという安心感の中でくりかえして自分なりに言っている。これまでかかわった感じからも。

A：それに絡んで「全部」の中にH男は『自分のイメージする“レース”を実現させたい。実現していく喜び』があるのかな。とてもレースには見えないが。

E：H男君が指示を出して、自分の理想があって作らず見ていたので、そこで遊びたい気持ちがあったの？

F：I男、H男は『自分の言ったことを実現していく楽しさを感じているのでは』^② J男『友達の言葉、行動に同意して仲間意識を持ちながら遊ぶのが楽しい』^③ のではないだろうか。

C：（下線②③に対して）「実現する」まではっていない。単純に言い合っている姿にそんな明確なイメージがあるのかな。何となく知った言葉を使って言っていて、それに刺激を受けてI男が似たように言っているだけのように思う。4歳児や5歳児のように具体的なイメージはほとんどない。

A：J男は人に頼まれて、そこまで思っているかどうかはわからないが、『人の役に立つ喜び』^④を感じているのではないだろうか。逆にH男とI男は思いを伝えて、J男たちが『はい』と言ってくれる嬉しさを感じているのではないだろうか。

C：（下線④に対して）言葉の出にくい、意思表示をしないK男君だから、『人の役に立つ喜び』ではなく「自分のしていることが、友達に受け入れられていること、拒否されていないこと自体が嬉しい」。自分のしていることを「レース」と言ってもらったり、J男のオウム返しのようにしながら、友達に遊びのイメージを与えている、自分の行為が返ってくることが面白いと感じているように思う。（人の役に立つ喜びという）ところまで行っていないのではないだろうか。

C：J男、K男は『自分の考えで自由に物を動かして遊ぶことが楽しい』そもそも部屋からものをたくさん運んで、それが許されて、どんどんやれる、繰り返すこと自体が面白い。また体を使って遊ぶ（物を運ぶ）ことをやっている。そういう事自体に達成感、満足感がある。

A：J男、K男『自分で考えて積み木や衝立を置く面白さ』を経験している。『構成する』とまではいかないが、一応置いたり並べたりした積み木は整っている、何でもかんでも置いたりしていない。

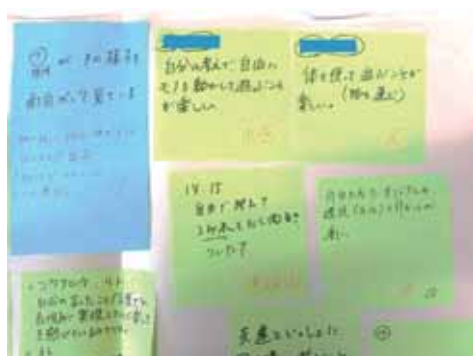
B：『自分たちでオリジナルの環境（お家）を作ることが楽しい』のかな。

A：そもそもお家なのかなという……（笑）この動画を見て面白すぎて、（担任として）笑っていた。

B：（J男が）「おっっ」と言いながら物を運ぼうとする姿とか、楽しそう。

C：全体的にこの4人が同じ場で遊ぶということ自体が楽しい。つながっているようでつながっていないが、その場に居合わせてなんとなく響き合っている瞬間があることが楽しい。

協議② 10の姿を視点として



10の姿から見ると、何が芽吹きつつあるのかについて、協議し、出し合った付箋の横に記録する。

考察① 10の姿から捉えた育ちにつながる援助や環境構成

テーマである10の姿から見た子どもの育ちに対して、どのような環境構成や援助が必要かについては、研究2では担任は撮影をしていたので直接的なかわりはないが、「教師が面白がって見ている雰囲気、面白がる先生が近くにいるという環境、その先生が私にとって大事な先生であること」が挙げられた。実際担任は、撮影する際、3歳児の世界が面白く、撮影しながら微笑んでいたため、教師の思いが雰囲気となって伝わっていたのだろう。また夏場に使うプールをプールとしてだけ使用するのではなく遊び場として使用したり、保育室内のままごとを屋外に持っていくことが許されたりすることも、これまであたりまえに考えていたことだが、大切であることがわかった。特に3歳児は心ゆくまで遊ぶことができる遊具がたくさんあることも大切な環境であることがわかった。

考察② 協議の方法を振り返る

動画を通してのシェアリングは事前準備があると短時間でも成立することがわかった。この協議は1時間で行うことができた。一方で、見たい場面が撮れていない。動画を通した協議は動画をどう撮っているかに左右されるところに危うさがあることがわかった。

子どもを理解する際に、自分の見方だけでは限界がある。協議において他の人の目を通して、違う見方があることにふれられたとき、子どもの見方が変わり保育も豊かになる。「私は違う、こう見たよ」と言い合える関係性がないと違う見方には出会えない。そのため協議においては多様な意見を受けとめ、さらに意見を述べ合うことで協議を深めていくことが大事である。

5. まとめと今後の課題

研究1では、保育において子どもが何を楽しんでいるのか、どのような経験をしているのか、子どもの姿から事実を正確に捉えることができないと、教師の思い込みで姿を捉え、内面理解もずれてしまうことがわかった。保育者（教師）の『水を足につけている』＝『水の感触や感覚を味わっている』という思い込みが、子どもの表情、つぶやき、しぐさに注意を向けることができなかったのかもしれない。そうしたことが写真を手がかりとして、様々な意見を出し合い、質問を重ね、それに保育者が応えることで、明らかにされていった。

研究1の幼児理解が正確でないと適切な環境構成や援助ができないという学びから、更に研究を深めるため、研究2では保育場面の動画を用いて協議を行うようにした。子どもの姿がそのままの事実として提示され、協議できることにより、「子ども達が楽しんでいるところ、経験しているところはどこか」といった協議内容に対して、研究1よりも多様な意見が出された。協議では、参加教員それぞれに発達段階の理解や保育観が異なっており、「子ども達が楽しんでいるところ、経験しているところはどこか」については、見解の相違が生まれた。この見解の相違が多様な意見をつくり、お互いの意見を聞き合おうとし、教員一人一人が自分の発達段階の理解や保育観を捉え直す機会となった。

今後の課題として、保育者が伝えたい場面や、他の教員が見たい場面の写真や動画を撮ることが挙げられる。研究2の動画も最後はどうなったのかなど、見たい場面が録画されていなかったのも、子どもの姿や内面理解をしづらいたところがあった。また10の姿についても一場面の写真や動画だけでなく、他の遊びの場面や4歳児、5歳児と発達段階に沿うなどして、考察をしていきたい。

今回の協議は、研究1、2ともわずか1時間以内で行っており、新たにチャレンジした写真や映像の活用は、短い時間で保育を共有し協議を行うために有効な手段であった。来年度もテーマに向けて、教員一人一人の幼児を理解する力量が上がり、協議が深まるように、効果的に写真や映像などを使用できたらと考える。

中部支部

研究主題 「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、
どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か
(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して)」

1. 研究にあたって

昨年度の研究では“子どもの興味がどこにあるのか” “子どもの育ちはどうなのか”に視点をあて幼児理解を深め、各年齢のそれぞれの時期にどのようなねらいをもって保育にあたるのかを考えていくことが大切であることを確認した。また、個々の育ちを踏まえながら、一人一人の子どもに、今経験させたいことを考えていくことが大切であるということを実感した。

今年度は、子どもの興味や気付きなど具体的な姿を根拠にどのような思いや育ちがあるのかを考え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせながら、どのように支えていくことが大切かを考えることで、「幼児期にふさわしい生活」を送るために必要な環境構成と保育者の援助について研究を進めていくこととした。

2. 研究の進め方

- 研究保育の会場園である幼保連携型認定こども園えだがわの保育を中心に研究を進める。
- 幼保連携型認定こども園えだがわ3・4・5歳児の研究保育の具体的な場面の記録を通して、主題に基づき協議や検討をする。
- 研究員会において、内容や課題を共通理解する。その後、各園において検討し、支部全員の研究として進める。
- 夏季には全員参加による研修を行う。
 - ・エピソード記録から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へのつながりを考察しグループ協議を行う。
 - ・研究内容やまとめについて協議する。

3. 研究経過

実施日	会場	内容
4月9日	いの町枝川 コミュニティセンター	支部総会（役員改選、研究テーマ、年間計画などについて）
5月18日	高知県教育センター本館	第1回研究推進委員会（研究の進め方、分散会役割について）
5月24日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	研究員会（研究の進め方について）
6月5日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	中部支部研究会（研究保育、研究協議） 幼保連携型認定こども園えだがわ5歳児 講師 高知大学教育学部附属幼稚園 副園長 中山 美香 先生 第2回研究推進委員会

6月13日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	中部支部研究会（研究保育、研究協議） 幼保連携型認定こども園えだがわ4歳児 講師 高知大学教育学部附属幼稚園 副園長 中山 美香 先生 研究会（6/5の研究保育の考察やまとめについて）
7月2日	いの町立伊野幼稚園	研究会（6/13の研究保育の考察やまとめについて、夏季研修会 について）
7月30日	いの町立伊野幼稚園	中部支部夏季研修会（事例の考察、研究協議、高知県国公立幼稚園 こども園教育研究会の役割分担） 研究会（研究の進め方の検討、6/5・6/13の研究保育の事例 と考察について）
8月5日	いの町立伊野幼稚園	研究会（研究保育のまとめ検討、考察について）
9月12日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	中部支部研究会（研究保育、研究協議） 幼保連携型認定こども園えだがわ3歳児 講師 高知県幼保支援スーパーバイザー 岡上 直子 先生 高知大学教育学部附属幼稚園 副園長 中山 美香 先生 研究会（研究保育のまとめ検討、考察について）
11月7日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会 研究公開保育（3・4・5歳児） 研究報告 分科会研究協議 講師 高知大学教育学部附属幼稚園 副園長 中山 美香 先生 第3回研究推進委員会（研究協議の進め方について）
12月5日	いの町立伊野幼稚園	研究会（教育研究会分科会のまとめ、全体会のまとめ）
12月25日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第4回研究推進委員会（「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について）
1月23日	いの町立伊野幼稚園	中部支部研究会（「幼児教育のあゆみ」のまとめについて）
2月4日	いの町枝川 コミュニティセンター	支部総会（事業報告及び本年度のまとめ、次年度にむけて）
3月11日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第5回研究推進委員会（「幼児教育のあゆみ」のまとめについて）

4. 研究内容

第1回研究保育 6月5日（水） 幼保連携型認定こども園えだがわ

5歳児 うみ組（男児9名、女児10名 計19名） そら組（男児10名、女児10名 計20名）

うみ組のねらい（○）内容（●）（抜粋）

- 自分の思いや考えを自分なりの言葉で相手に伝えようとする。
- 試したり、工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう。
- 困ったときには言葉にして、助けを求めたり、友達に聞いたりしようとする。

- 自分の思いを伝えたり、友達の考えを受け入れたりして遊ぶ。
- イメージしたものに向かって工夫して作る。

保育の視点

- ◆どんなことに興味をもって関わりどのように遊んでいるか。(事実を正確に捉える)
- ◆どんなことに楽しさを見出しているか。(根拠をあげながら推し量る)
- ◆本日の保育のねらいに基づき、明日の保育をどのように充実させていくとよいと思うか。

(環境構成と援助の側面から)

※以後4歳児研究保育(6/13)、3歳児研究保育(9/12)も同じ視点で保育参観と研究協議を行った。

〔研究協議〕

KJ法で多くの子ども達が遊んでいた3つの遊び(砂場・虫探し・色水遊び)を様々な角度から多面的に考え協議した。



〔研究員会〕

研究員会では、以下の経過からこの2場面を選んだ。

- 1 “透明の水”という言葉のイメージに近づけるために工夫し試していた様子とその後の姿について、明日の保育につながる具体的な援助の手立てを学びたいという保育者の願いを踏まえた。
- 2 自分なりのイメージをもち試行錯誤しながら遊ぶ姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照らし合わせて研究し、必要な環境構成と援助を探っていきたいと考えた。

温泉作りの場面

砂場で、6～7人の子ども達が、友達と一緒に力を合わせて大きな穴を掘り、中に水を溜めると「温泉ができた」と口々に言いながら入って遊んでいた。

しばらくして、みんなが遊びの場からいなくなった後、5歳児の[A子]と[B子]が、再び温泉のところに戻ってきて遊び始めた。[A子]は「温泉って、きれいなお水だね。きれいなお水って、透明で」と言いながら、1人で何度も水道できれいな水を4リットルのペットボトルや片手鍋に汲んできては入れていた。そして、近くにいた[B子]に「この泥水、集めて」と言った。すると、[B子]が4リットルのペットボトルを溜まった泥水に沈めて汲むと、水道のところへ捨て、蛇口からきれいな水を汲んできて温泉に入れ始めた。その姿を見た[A子]は、それまでよりも足早に水運び始めた。

型抜き場面

「A子」と「B子」は、砂の型抜きをして遊び始めた。「A子」は、角の立ったきれいな形を作りたくて、砂をすくうスコップの形を変えたり、「B子」のアドバイスを聞き、容器への砂の詰め方を変えてみたりするなど、自分なりに試行錯誤をしながら遊ぶ様子が見られた。自分のイメージ通りに型抜きができあがると、今度は保育者に見せたくなり、手のひらに乗せて運ぼうとし始めた。一度、皿の上に抜いたものを、両手で包み込むようにしながらそうっと手のひらに乗せようとするが、何度やってみても上手くいかない。「あれ？何でできんがやろう」とつぶやきながらも、やがて、砂をいっぱい詰めた型抜きの容器を手のひらに伏せて置き、そのまま保育者のところまで運ぶ方法を思いついた。「これ、見て」と「A子」が差し出すと「わくわくするね、何やろう？」と言いながら容器を取ろうとした保育者に「そうっと開けてよ」と念を押した。

〔7月30日 夏季研修会〕

2つのエピソード記録を基にグループ協議を行い、5歳児らしい姿が見られたところを抽出し、それが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にどのようなつながっているかを捉えた。

●5歳児らしい姿が見られたところと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に結びつくところ

温泉作りの場面	型抜きの場面
<p>●透明という言葉の意味を理解し、今までの経験から温泉のきれいな水をイメージしてこだわりをもって作ろうとしている。 →（思考力の芽生え 社会生活との関わり）</p> <p>●2人で共通のイメージをもち、話し合ったり相手のしていることを感じ取ったりしながら遊んでいる。 →（協同性 言葉による伝え合い）</p> <p>●工夫したり試したりしながら諦めずに体を使って何度も水を汲んできている。 →（自立心 健康な心と体）</p>	<p>●自分の失敗経験を踏まえ「そうっとあけてよ」と保育者に伝え、イメージ通りに上手くできた物を見せたい。 →（思考力の芽生え 言葉による伝え合い 豊かな感性と表現 道徳性・規範意識の芽生え）</p> <p>●友達の意見を聞き、自分の遊びに取り入れている。 →（協同性 言葉による伝え合い）</p> <p>●道具を変え、工夫したり試したりしながら何度も作っている。 →（自立心）</p>

遊びや場面が違っても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に結びつくところで共通した姿が表れていることがわかった。これを受け、経験していることや今の育ちを考え、明日につながる環境構成と援助について考察を行った。

〔夏季研修会での研究協議より〕

- 温泉をきれいな水で作ろうとしたり2人で作ろうとしたりする姿は、これまでの経験を生かし、友達と同じ目的に向かっていこうとしている5歳児の姿ではないだろうか。子ども達が、透明の水にするために何度やっても上手くいかないときには、最後まで諦めずに挑戦し続けていけるような援助が必要であると思われる。水を溜めて少し時間をおいて水の色が落ち着くのを待つ、または、シートやタライを用いるなど、子どもが試したり工夫したりできるように保育者が一緒に考えてみるような関わりがあればよかったと思われる。
- 型抜き場面では、自分のイメージに合った素材や材料を選ぶ環境があったことで、遊びが広がり、友達とのつながりを感じながら選ぶことができたのではないだろうか。角の立った形を作りたくて、丸型のスコップを角型のスコップに変えたり、容器や皿を変えたりしながら試行錯誤し作っていた。保育者は子どもに「そうと開けてよ」と言われたとき「どうして？」などと聞き返す援助があれば、子どもは自分の思いや考えを表現する力につながり、保育者はその子なりのこだわりを知り、今必要な環境構成や援助について探ることができたのではないか。
- 3、4歳児の自分なりの見立てやイメージの世界を楽しむ姿とは違う、5歳児の色や形にこだわり試行錯誤してイメージを実現しようとする姿（思考力の芽生え 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 豊かな感性と表現 言葉による伝え合い 自立心）を理解し大事にしたい。5歳児後期に友達と共通の目的をもって遊びを楽しむことができるようになってきた時に、遊びの必要性から形や色などにこだわり工夫する姿が見られるようになっていくと思われるので、そこにつながるために今の子ども達に合った経験ができるような援助を考えていくことが大切ではないだろうか。

〔9月12日 研究員会〕

夏季研修会での研究協議を受けて、研究員会ではそれぞれの遊びで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が幼保連携型認定こども園教育・保育要領等のどの部分につながっているのかを探った。

抜粋～思考力の芽生え～

幼保連携型認定こども園教育・保育要領

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

温泉作りの場面

砂場で水や用具などの身近な環境に積極的に関わり、自分から気付いたり発見を楽しんだり、考えたり、振り返ったり、それを別のところで活用したりするようになる。

型抜き場面

身近な物や用具などの特性や仕組みを生かしたり、いろいろな予想をしたりし、楽しみながら工夫して使うようになる。物との多様な関わりの中で、物の性質や仕組みについて気づき、思いを巡らし、物を使いこなすようになる。

同じ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であっても、そのときの子どもがどのような育ちや姿を見せているのかを探ってみることが必要ではないかと考えた。

例えば温泉作りの場面では、要領に“物の性質や仕組みなどを感じ取ったりしながらする”と示されているので、水の性質や透明になる仕組みを感じ取るための援助が必要となるのではないだろうか。

また、型抜きの場面では“身近な物や用具などの仕組みを生かしたり、いろいろな予想をしたり”する姿が見られていた。角の立ったイメージ通りのものを作るためにB子に聞きながら、道具を変えて試行錯誤するためのよい環境があったことで挑戦し続けられたと思われる。

また、**A子**が保育者に「そうっと開けてよ」と言ったのは、自分の失敗経験を踏まえ保育者にイメージ通りの上手くできたものを見せたい気持ちがあることが分かる。要領に示されている“新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる”姿が見られるようになるには、その子なりの5歳児らしいこだわりを理解した援助が必要になるとと思われる。これは、夏季研修会の研究協議ともつながることが分かった。

第2回研究保育 6月13日(木) 幼保連携型認定こども園えだがわ4歳児

にじ組のねらい(○) 内容(●) (抜粋)

- 身近な生き物に親しみをもって関わろうとする。
- 気の合う友達と関わりながら遊ぶ楽しさを味わう。
- ダンゴムシやカエル、ツマグロヒョウモンを見たり触ったり世話をしたりする。
- 保育者と一緒に自分の思いを友達に言葉で伝えながら遊ぶ。

つき組(男児10名、女児8名 計18名)

にじ組(男児11名、女児7名 計18名)

ほし組(男児12名、女児7名 計19名)



【研究協議】

前回と同様に大きな3つの遊び(砂場・虫探し・色水遊び)に分かれて、KJ法で先に挙げた視点に沿って協議を行った。子ども達の楽しんでいた姿から経験していることと今の育ちを考えた。

【研究員会】

様々な生き物に触れ合える環境づくりをしたいという園の願いや、生き物の扱い方に気付かせたいという保育者の思いを受け、研究協議の中から“虫探し”の場面について考察を深めることにした。

子ども達は、個々に虫捕り網、図鑑、虫かごや飼育ケースを持つと2~3人ずつ連れ立って、10人ほど園庭に出てきた。「カマキリがおったで」と1人が声を上げると5人の友達が急いで集まったり、園庭を飛びチョウチョを捕まえたくて、1匹を数人が虫捕り網を持って追い掛けたり、プランターのキャベツに青虫がいらないか念入り

に探したりしていた。

園庭の隅にある大きな桜の木の下には4～5人が集まり、図鑑にあるカブトムシのページを開いて見ながら「カブトムシって木の上におるがやって」と見上げたり「雪が降る日は、穴の中におるがやって」と言いながら木の幹にある穴に木の棒を差し込んで突っいたり、覗いたりして、虫を探す姿が見られた。また、図鑑を見ていて、カブトムシの幼虫が土の中で育つことを知ると、足元の赤土をスコップで掘って探してみようとしたり、幼虫を見つけたときに必要だろうと、サラサラの土を飼育ケースいっぱいに入れ準備したりする子どももいた。

〔C男〕は図鑑や飼育ケースを持って園庭に出たものの、蓋のない飼育ケースだったので、困った表情のまま、園庭を10分以上歩き回っていた。やがて、色水遊びのところにいた保育者のところに行くと「蓋がない」と伝えた。保育者が「蓋がないの？どこから持ってきたの？」と聞くと、園庭に持ってきたときから蓋がなかったようだった。すると〔C男〕が「箱で（蓋を）作りたい」と言ったので「ああ、蓋が欲しいの？作りに行ってみる？」と保育者が答えると、〔C男〕は安心したような表情で、大きくうなずいた。保育者は近くの砂場にいた他の保育者に〔C男〕と一緒に保育室へ行くことを伝えると、その場を離れた。



その後、空き箱を使って飼育ケースの蓋を作ってもらった〔C男〕は「プールにオタマジャクシがおるで、カエルになるかも」と保育者に言いながら、プールのところへ急いで行った。プールの横にあるクローバーの生えたところでは、小さなカエルがいることを知っている子ども達が草をかき分けて探し、見つけると飼育ケースに入れて、嬉しそうに持ち歩いたり、友達や保育者に見せたりしていた。〔C男〕は、飼育ケースの中で水に浮いて死んでしまったカエルを持っていた友達に「カエルはね、水の中は好きじゃないの。赤ちゃんガエルはね」と伝えたり、飼育ケースいっぱいに入れた中にカエルを入れようとしていた友達に「このカエル、水いらんで」と知らせたりしていた。

① 経験していることと今の育ち

- 生き物に強い関心を持ち、自ら関わろうとしている。
- 自分の知り得た情報を基に、自分なりにやってみたい。
- 自分なりに考えて遊ぶことを楽しんでいる。
- 自分の知っていることを言いたい。

② 明日の保育につなげるための環境構成と援助

- ・飼育ケースの置き場所を子どもの動線に合わせて見直す。
- ・捕まえる生き物によって飼育ケースと虫かごとどちらがふさわしいのか子どもと考える機会をもつ。
- ・飼育ケースの蓋の確認や人数に合った数の準備をする。（戸外には飼育ケースと虫かご合わせて15個程あった。飼育ケースの数を増やして個々が持てるようにしてみたらどうだろうか。）
- ・安全面に配慮しながら（プール）、生き物と触れ合う場を確保できるよう工夫をする。

③ 本日のねらいと内容について

明日の保育につなげるために考察をした後で、内容について再度考え直した。子どもが楽しんでいることや経験していることをしっかり捉え、ねらいに対してより具体的な内容を書くことが明日の保育につながる大切なことであると思われる。

ねらい (○) と内容 (●) から

○身近な生き物に親しみをもって関わろうとする。

●ダンゴムシやカエル、ツマグロヒョウモンを見たり触ったり世話をしたりする。



●ダンゴムシやカエル、ツマグロヒョウモンのいそうなところを探し、捕まえたり、生き物のおうちを作ったりしようとする。

第1回研究保育後の環境の再構成と子どもの姿の変容について

幼保連携型認定こども園えだがわでは、大人数でも十分に遊び込める園の場の使い方について研究していきたいという思いがあったため、明日の保育につながるための環境構成の改善について具体的に話し合った。

○すべり台降り口の空間（砂場内）

すべり台の降り口が砂場の中であり、すべっている子どもとそこで遊ぶ子どもがいた。研究会のアドバイスを職員間で共有し、すべり台で遊びたい子どもに気付けるよう場の使い方について投げ掛けていった。子どもが気付いてすべり台降り口のスペースを作り遊びようとする姿が見られた。すべり台で遊びたい子どもは、スペースができたことで水溜まりもなく最後まですべりきることができた。子どもが気付いてこのスペースを避けることは、遊びに夢中になると難しいので、繰り返し保育者が投げ掛けていくことや一緒に考えていくことが必要である。



○“きのおうち”周りのプランター

“きのおうち”を通して子ども同士のやり取りや、ごっこ遊びを楽しめるのではないかと考えた。しかしその周りに大きめのプランターがあることで子どもの動きや遊びを妨げているのではないかと考えた。そこで、カウンターになっている窓からやり取りをしやすいようにプランターを移動させて空間を確保した。プランターが無くなったことで、家の中でごちそうを作ってお客さんを呼び、カウンターで友達とやり取りをしながらお店屋さんごっこ（アイス屋さんやチョコレート屋さんなど）をして遊ぶ姿が見られるようになった。カウンターのところを広く使えるようになり、やり取りをする距離も近付いた。

○砂場と赤土山の間空間

砂場と赤土山の間には寒冷紗を張っており、木陰もあって暑さをしのいで心地よく遊べる空間になっていた。しかし、プランターや花壇もあり、遊びのスペースが狭まって遊びにくい環境となっていた。そこで、寒冷紗下の陰にはテーブルを用意し、花壇周りのプランターを移動させて空間を広げた。年長児は寒冷紗の下が日陰で涼しいことが分かっているので、赤土山の下でごちそう作りをしていた子ども達が、広がった空間に自分たちでテーブルを運んできて遊びの場をつくる姿が見られた。そこからお団子屋さんやパーティーごっこが始まった。

○砂場の砂の掘り起こし

4歳児の砂場で遊ぶ子ども達は何度も水を汲んできて水を溜めることや、トイなどを使って水を流し込むことを楽しんでおり、砂場のほとんどが水溜まりになることがあった。4歳児研究保育前日もこのような様子が見られており、前日に水はけをよくするために下の方からしっかり掘り起こした。砂がふかふかして足から感じる感触が違い「ふわふわやね」「気持ちいいね」などと子どもから言葉が出てきた。掘り起こしたことで水はけもよくなり、ほどよく水がはけて何度も水を流し入れて溜める姿が見られた。また、子どもが穴を掘りやすくなり、掘った穴をつなげたりそこからトイを使った遊びに発展したりした。

○色水コーナーの机のシート

色水コーナーでは、カラーペンキを塗ったテーブルを使っていたので、テーブルの色が写って透明のすり鉢ボウルに色が出たことが分からなかったり本当の色水の色と違って見えたりしていた。今の4歳児の子ども達は色水遊びが楽しくなってきたり、興味を示し始めたばかりだったので、色が出たことが分かりやすいように白いシートをテーブルに掛けた。白いシートを掛けたことで、作っている色水の色の変化が見て分かりやすかった。自分の作った色水の色を「見て、○○色になったで」と保育者に伝える姿が見られた。また、隣で作っている友達の色水を見て「○○ちゃんのは○○色やね」などと友達の作っている色水にも興味を示して会話をする姿も見られた。

第3回研究保育 9月12日(木) 幼保連携型認定こども園えだがわ

3歳児 こあら組(男児8名、女児8名 計16名) うさぎ組(男児8名、女児9名 計17名)

こあら組のねらい(○) 内容(●)

- 保育者や友達と体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- 保育者や気の合う友達と関わって遊ぶ楽しさを味わう。
- 自分の思いを言葉や身振りで伝えようとする。
- 砂や水の感触を味わったり、自分なりに作ったりしながら遊ぶことを楽しむ。
- 保育者や友達と一緒にかけっこをしたり、フープを跳んだりして体を動かして遊ぶ。
- 保育者や気の合う友達と一緒にごちそうや温泉、川をつくる。
- お店屋さんやままごとなどで遊ぶ中で保育者や友達に自分の思いをつたえようとする。
- 砂や水を混ぜたり、容器にうつしたりして自分なりにイメージして遊ぶ。

うさぎ組のねらい(○) 内容(●)

- 自分の作りたい物を作ったり、砂や水の感触を味わったりしながら遊ぶことを楽しむ。
- 保育者や同じ場にいる友達と関わって遊ぶことを楽しむ。
- 保育者や友達と体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- 自分の思いを言葉や身振りで伝えようとする。
- 保育者や同じ場で遊ぶ友達と一緒に砂を掘ったり水を溜めたりして、温泉などを作る。
- 砂や水、赤土、身近な素材を使って自分の作りたいものを作る。
- 好きな役になったり、作りたい物を作ったりして遊ぶ。
- 保育者や友達と一緒にかけっこや、フープを跳ぶことなどを通して体を動かして遊ぶ。
- 自分の作りたい物を作る中で、自分の思いを言葉にしたり保育者とやり取りをしたりする。

本日の保育より学んだこと

3歳児の研究保育を見た後、研究協議を行った。互いに意見交換をしながら本日の保育を振り返った。その後、2人の講師による講演・助言をいただき、年齢や育ちに沿った保育者の援助や環境構成についてさらに深く学ぶことができた。講師のアドバイスをうけて、付箋に現れた子どもの姿を“自分なりにイメージをもって遊ぶ”“自分を出す”

“夢中になって遊ぶ”の3点で捉えてみることで、今日子ども達がどんな遊びを、どのような思いで、どのように楽しんでいるか、また、その姿が見られるための保育者の関わりや環境構成はどのようなものだったのかを考えるきっかけになるのではないかと考えた。

子ども達は、砂場で保育者や友達と関わりながら、穴を掘ったり水を流したり食べ物に見立てて作ったりなどして、自分のイメージをもち、自分なりに思いを表しながら遊んでいた。また、運動会ごっこでは、保育者や友達と一緒に思いきり走ったり、ゴールテープの係を何度も繰り返したりする姿があった。

研究会で付箋を整理する中で、ほとんどの姿に上記の3点が混ざり合っていることが分かった。



※一部抜粋

黄色の付箋（黄） どんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいるか（事実を正確に捉える）	桃色の付箋（桃） どんなことに楽しさを見出しているか（根拠をあげながら推し量る）
砂	場
<ul style="list-style-type: none"> 自分が“これ”と決めたジョウゴを使って、繰り返しペットボトルに水を入れている。 	<ul style="list-style-type: none"> 確実に水が溜まっていくことが嬉しい。<u>自分で選んだジョウゴを使うことが楽しい。</u>
<ul style="list-style-type: none"> トイの上を流れている水を見ながら、ホースの位置を変えたりトイの中にパイプを入れたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろ試したり、水が流れる様子を見たりすることが楽しい。
<ul style="list-style-type: none"> 自分なりにカップ（7個）に水を入れてコーヒーを作り、お盆に載せて保育者に飲んでもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりに見立て、<u>保育者が喜んでくれることやお店屋さんになったつもりで遊ぶことが楽しい。</u>
<ul style="list-style-type: none"> ペットボトルに水を汲んで穴の中に入れることを何度も繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいことを自分のペースでできることを楽しんでいる。
<ul style="list-style-type: none"> トイをつなげたりトンネルを覗いたりした後に水を流し、流れないところは手で流していた。ペットボトルの蓋を2、3個流して見ていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のしたいことを実現させるために考えたり試したりして<u>上手くいったら嬉しい。期待感やわくわくする気持ちがある。</u> 流れることや流れなくなった不思議さが楽しい。
<ul style="list-style-type: none"> 砂を掘って穴に水を流す。友達の掘った穴とつなげて川にし、大きくすると、水を流して遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 水が流れる様子や勢いよく流れて水しぶきや泡が出る<u>ことが面白い。</u>イメージしたものを作ることも楽しんでいる。
<ul style="list-style-type: none"> 砂を掘って水を溜めた穴の中を歩く。腰をつけて足を伸ばす。足に砂を乗せて「気持ちいい」と言っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 水の冷たさや水を含んだ砂の<u>感触が気持ちよい</u>と感じている。

<ul style="list-style-type: none"> ・カップに砂を入れて並べ「いらっしゃいませ」「これが麦茶でこれが…」「こちらどうぞ」とフルーツ屋さんになりきってお店屋さんごっこをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カップを並べていろいろなフルーツに見立てるのが楽しい。<u>保育者や友達となりきって遊ぶことややり取りをすることが楽しい。</u>
<p>運 動 会 ご っ こ</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・保育者や友達と一緒に思いきり走って遊ぶことを繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>保育者と一緒に思いきり走ることが楽しい。</u>
<ul style="list-style-type: none"> ・友達がかけっこをしている中で、1人でゴールテープを持って保育者や運動会のお手伝いをしていた5歳児になりきり、何度も繰り返していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>友達が走って来た時にテープを離すのが嬉しい。</u>また、<u>保育者や運動会での5歳児の姿を真似して同じことができるのが嬉しい。</u>

研究会では、参観者が桃色の付箋に記入した“楽しさを見出している部分の下線”に注目した。それには3つの要素が浮かび上がってきた。

○やりたいことがすぐにできる、繰り返してできる環境

- ・じっくり楽しめる時間、場所、物の数

○保育者の見守り、存在

- ・受け止めてくれる、認めてくれる保育者の存在
- ・すぐに応答してくれる保育者の存在
- ・安全な環境のもと、やりたいことが思いきり試せる見守り

○年上の友達の存在

- ・モデルとなる友達が身近にいる（異年齢で関わることのできる遊び場）

桃色の付箋からは、3歳児が幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、自分の思いを十分に出しながら、夢中になって遊び込むことができる環境や、様々な人との関わりが大切であることが分かった。子どもの行動を肯定的な目で捉え、その行動をするに至った子どもの思いを知ること、その子にふさわしい援助が見えてくると思われる。こうした援助を通して保育者との信頼関係が深まり、じっくりと安心して遊び込むことができるようになっていくのではないだろうか。

高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会記録

令和元年11月7日（木） 幼保連携型認定こども園えだがわ

保育参観・協議の視点

- ① どんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいますか。（モノ、ヒト、コトへのその子らしい関わり方を探りながら記録する。）
- ② その遊びを通して、どのような感情が沸き上がっていると思いますか。また、それは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどの部分につながっていると思いますか。（どのようなことに面白さ、楽しさ、実現させたい願い、気付きなどがあると思いますか。内面を推し量る。）
- ③ なぜ、充実した遊びが展開できたと思いますか。良かった環境構成と援助を考えてみましょう。
- ④ 本日のねらいに基づき、明日の保育では、どのような環境構成や援助が求められるでしょう。

【3歳児分科会の協議より】※各分科会の協議で出た意見の記録より抜粋

- ・赤土がタライやトロ箱に分かれて入っていて、乾いたさら粉も準備されていた。また、水道が近くにあることで、水をすぐ汲みに行きやすい環境がよかった。赤土や砂遊びの場所にテーブルがあれば、ごちそう作りが別の遊び（お店屋さんごっこなど）に発展し、やり取りが増えていくのではないだろうか。また落ち葉などが置かれていて、遊びに使えてとてもよかった。さらにドングリも置いてみてはどうだろうか。
- ・おたま、スプーンなど使ってみたいと思える道具の数、種類が豊富で3歳児に合った素材が準備されていた。必要な物を取りやすく、片付けやすい環境だった。冷蔵庫に見立てた続きのできる置き場があることで連続的な遊びになっていたのではないか。
- ・氷鬼では、保育者がそばにいてルールを伝えたり、子どもの思いを受けとめ他の友達に知らせたりする援助をしていた。保育者が一緒に遊んだことで異年齢と安心して楽しめていたと思われる。しかし、発達に個人差が大きい3歳児には個々の子どもの姿に合わせて、じっくりと考えることができるような援助が必要だと思われる。3歳児が楽しめるような“むっくりくまさん”“しっぽとり”などを取り入れてみてはどうか。しっぽを取られたりタッチされたりするのを嫌がる子どももいるので、絶対に捕まらない場所を作るなどの工夫を試みたらどうだろうか。学年で遊ぶ時と異年齢で遊ぶ時が必要で3、4、5歳児それぞれの遊びを保障するために区切ったスペースをどう使っていくかを話し合っていくことが大切である。

【4歳児分科会の協議より】

- ・シリコンやプラスチックの型で、土の硬さを手で確かめながら水の量を加減して型抜きしている姿があったので、計量カップを準備してみてもどうだろうか。注ぎ口がとがっているのを水を注ぎやすく、また、目盛りがあり、分量を自分で調整できるので物の質や量の感覚を養っていくことにつながっていくかもしれない。また、小さい型にはスプーンがあったら便利だと感じた。
- ・鬼ごっこで、保育者のそばを離れられなかった子どもが、自ら行動して友達と一緒に遊ぶ姿が見られた。保育者が「友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい」と願っていたので、保育者から「2人で楽しかったね」などの認め言葉があれば、自分達のことを意識したり、友達と一緒に動くことの楽しさやうれしさを味わうことにつながったりしたのではないか。
- ・人数が多いので増え鬼や氷鬼などそれぞれの子どもが楽しんでいることを十分経験できるように、子どもの遊びを保障するためタイヤで区切ってスペースを作っていた。遊びが交わらないことで子どもが安心して安全に遊ぶことができていた。

【5歳児分科会の協議より】

- ・“うみそらコーナー”では、様々な素材や材料があり、触れることでその性質を感じながら子どもがイメージを形にする為に試行錯誤する姿があった。自分で材料を選び、すぐ見える位置にあった絵本を参考にしていた。また、友達の作っている物を意識して自分で作る姿も見られた。自分なりに作った物ができると保育者に見せ、認められたことで繰り返す姿があったので、一人一人の子どもの工夫したところや根気強く取り組んだ姿を認める言葉にプラスして「〇〇ちゃんが手伝ってくれたよ」「どうやるか聞いてみたら」など、さらに友達とつなぐ言葉掛けがあれば“協同性”や“言葉による伝え合い”“自立心”などの発達につながっていくのではないか。



- ドッジボールとサッカーの遊びをタイヤで区切り、自由に子ども同士で自分の考えを伝えながら折り合いをつけ、遊びの場を変化させることができる環境構成があった。ドッジボールのコートの広さは、今日の子どもには適していたように思う。時期や経験に合わせたコートの広さ、向きなどを子どもと一緒に考え、遊びによって固定しないようにタイヤの位置を意図的に変えてみるのもよいのではないか。
- ドッジボールでは、一人一人が楽しんでいるところが違うので、それぞれの子どもが今何を楽しんでいるのかを保育者が理解し、その子どもの育ちや発達に合わせたボールの硬さ、大きさ、素材を考えて、子ども自身が選んで遊べる工夫をしてみることで普段あまり参加しない子どもも楽しめるようになってくると思われる。

【講師の助言より】

- 今回4つの視点で協議をした。①の「どのように遊んでいるか」を見ることは、内面を推し量るのに、とても重要なことである。②の「どのような感情が湧きあがると感じますか？」では、これまで「何を楽しんでいますか？」などのフレーズで協議をすることが多かったと思うが「楽しい」だけではおさまらない感情があり、子どもの実現させたい思いや気づきが促されているような場面も多面的に捉えてほしいと考えた。また、研究テーマに迫るために「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にどのようにつながろうとしているのかを考えてもらった。「まず自分はこれをどう見るか？」ということが重要である。③では、連続的な遊びになっていったポイントから、良さをしっかりと自分の中で感じ分析してほしい。また、自己満足にならないために④を入れた。特に③と④を口頭で協議したのは、自分なりに考え、他者の意見を聞きながら練り合いをし、お互いに深め合う協議をしてほしいと願った。協議のスタイルの1つとして取り入れてほしい。
- 実施園は、保育者同士で大事なところを共有し、温度差を感じない寄り添った援助を行っている。仲間と大事なところを共有しながら一つの保育・園をつくり上げている。
- 園舎の構造上、クラス・学年間交流が難しい課題を乗り越えたいという保育者の願いが、5歳児共同の遊び場“うみそらコーナー”やほし組の製作コーナーの環境構成にあった。保育室だけが遊びの場ではないことや、自由に遊びの場を構成するということがどういうことかを子どもと考えることができたのではないか。
- 子どもと一緒に考え、共につくるという、急がず焦らない日々の積み重ねを感じた。自然物の配置・分類に手作り感があり、手を伸ばせば届く手狭な範囲に製作の材料や参考図書やひな壇的な展示コーナーがあった。製作の机を中心にしながら、放射状に子どもの動きが展開されていたので、豊かに刺激をし合うという場の取り方が良かったのではないか。
- 3歳児の部屋と赤土山が離れているために、3歳児の中には赤土山に行けない子どももいたので、前庭にタライに入れた赤土を運び、環境づくりをしていた。このように、研究保育を積み重ねる中で学びを実践に移すことが大事である。
- 指導案の「この頃の子どもの姿と保育者の願い」の中に「経験していること」を波線の下線で表すなど、見やすくするための様式変更を行ってきた。それぞれの園のやり方があると思うが、持ち帰って考え直してほしい。子どもが興味・関心を豊かにしていくための環境が最初にあって、それだけでは子どもは興味をもつとは限らないので、そこに援助が必要となる。そのため、「予想される子どもの姿と興味・関心をもっているところ」の次に環境構成を先に表記する方がよいのではないか。また、環境構成ではそれぞれの年齢、それぞれのタイミング、分量なども入れてほしい。
- 研究発表では、保育を見ていない保育者にも事例を分かりやすく伝えるために、写真・吹き出し・対比などの工夫をしながら分かりやすく伝えていくことも大切である。発表を通して伝えたいことが明確に伝わるのが大切である。

5. 支部の各園で学んだこと

- ・「事実を正確に捉える（時間や回数、視線の高さなど）」「自分の主観で見るだけでなく確認する」ということが大切だと分かった。自分の思ったことと、事実を照らし合わせて考察することで、一人一人の子どもにふさわしい環境構成や援助が考えられることを学んだ。
- ・研究協議では、各グループにより協議の内容や進め方を考えて行ったことで、様々な手法を知る機会となった。少人数でのグループ協議では、個々の意見が出しやすく、多様な意見を聞き、場面を絞って考察を深めることもできた。このことで、経験の浅い保育者が、自分の意見を話しやすく自分の保育に生かしていけるアイデアを得られる学びの場となった。
- ・色水をする際、机の色を白にすることで、より正確な色水の色を把握することができるという工夫を取り入れ実践した。すると、色水だけではなく、泥で色のついた水の微妙な違いにも気付き、“きれいな色水”を作りたいという子どもは、水を汲み直しに行くこだわりを見せるなど環境構成の大切さを学んだ。
- ・子ども達が興味や関心をもって遊ぶ姿から内面を探り、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へのつながりを考えていくことで、今の子どもの育ちに必要な保育者の援助や環境構成について学ぶことができた。その中で、子どもの姿を正確に捉え、内面を推し量ることで幼児理解をし、園全体で連携しながら、明日の保育を考えていくことが「幼児期にふさわしい生活」につながるということが分かり、改めて自分達の保育を見る目を向上させていくことの大切さを実感した。今後も園の教育目標や指導計画と照らし合わせながら、その年齢にふさわしい遊びや育ちを保障できるよう、日々の保育の充実に努めていきたい。

6. 次年度に向けて

今年度の研究では、各年齢の保育を基に、子どもの興味や気付きなど、参観者が見た事実を集め、子どもに湧き上がる様々な感情について根拠をあげながら推し量った。子どもの今の育ちが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどこにつながっていくのかを探ったり、具体的な内容が明日の保育につながることを確認し、ねらいや内容について捉え直しを行ったりした。それぞれの場面を通して環境の見直しをしたことから、再構成による子どもの変容を捉えることもできた。また、研究協議の後の模造紙や付箋から楽しさを見出している姿について考え、必要な環境構成や援助を探るなど、いろいろな角度から、幼児期にふさわしい環境の構成や保育者の関わりについて考えることができた。これらの学びをそれぞれの園においてしっかり共有し、保育者自身の、そして園全体の保育の改善に取り入れていきたい。子どもと長く付き合っているからこそ、担任は、見方が固定化されてしまうこともあるが、保育参観後の研究協議のやりとりの中で違う捉え方にも気が付き、新たな環境構成と援助について考える機会となった。今後も互いに学び合い深め合える方法を常に探りながら研究に取り組んでいきたい。

高岡支部

研究主題 「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、
 どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か
 （幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して）」
 ～子どもが興味関心をもち、
 主体的に遊ぶようになるための環境の構成や教師のかかわり～

1. 研究にあたって

昨年度の研究では、3、4、5歳児の事例を通して、教師は一人一人の育ちを細かく捉えながら肯定的に受けとめたり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通して必要な経験は何かと考えたりしながら援助することの大切さを学んだ。また、自分で工夫できるように、子どもの姿に合わせてたり予測したりしながら環境を構成していく大切さも再確認した。そして、一人一人に寄り添い、その子の弱いところや困り感など細かい読みとりをしていく必要があることも学び、各年齢での発達をどのように捉えて、必要な経験や援助を見極めていくのかという課題も出てきた。

本年度は、各園の子どもの実態を話し合う中で、子どもが様々なことに興味や関心をもちながら主体的に生活することが“幼児期にふさわしい生活”なのではないかと考え、子どもが主体的に遊んでいる姿から、どのようなことに興味や関心をもって遊んでいるのかを読み取りながら、それが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどこにつながっているのかを考え、育ちに必要な環境の構成や教師の援助とは何かを探っていきたい。

2. 研究の進め方

- 高岡支部の5園に各1名の研究員を置き、研究を中心的に進めていく。
- 幼保連携型認定こども園さくらんぼ園にて2回の研究保育を行い、4、5歳児の研究保育から協議をし、講師の助言を受けながら主題に迫っていく。
 - ・協議はKJ法で行い、①子どもがどんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいたか、②その遊びを通して、どんなところに楽しさを感じていると思うか、③明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と援助、④《幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿》へのつながりを考えるという流れで意見を出し合い進めていく。
- 研究保育後に研究員会を行い、研究保育の中でわかったことや学んだことを事例にまとめ、主題にそって研究を深めていく。
 - ・具体的な子どもの姿や遊びの様子から事例をまとめ、前日までの様子や教師の思いも含め考察する。
 - ・研究員は各園に研究保育や協議内容を伝え、各園において事例検討し、支部全体の研究として進める。

3. 研究経過

実施日	会 場	内 容
4月3日	越知町立越知幼稚園	高岡支部総会 30年度活動報告 会計報告 31年度役員改選 研究計画等
5月18日	高知県教育センター	第1回研究推進委員会 (研究の進め方・分散会役割について)
5月23日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (今年度の研究の進め方について)
6月5日	いの町幼保連携型 認定こども園えだがわ	第2回研究推進委員会 (研究保育・研究協議・研究の進め方について)
6月13日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第1回研究保育の打ち合わせ)
6月20日	津野町立幼保連携型 認定こども園さくらんぼ園	第1回支部研究保育 研究協議 (4歳児) 講師 高知県幼保支援アドバイザー 山本美和先生
7月31日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第1回研究保育の事例検討)
8月21日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第1回研究保育の事例検討の再考と考察検討)
9月10日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第1回研究保育の事例のまとめ・考察)
9月17日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第1回研究保育のまとめ・考察)
10月17日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第2回研究保育の打ち合わせ)
10月31日	津野町立幼保連携型 認定こども園さくらんぼ園	第2回支部研究保育 研究協議 (5歳児) 講師 高知県幼保支援アドバイザー 中山 富江 先生
11月7日	いの町立幼保連携型 認定こども園えだがわ	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会 (研究保育・研究報告・研究協議) 第3回研究推進委員会
11月11日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第2回研究保育の事例検討)
11月19日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第2回研究保育のまとめ・考察)
11月26日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (第2回研究保育のまとめ・考察)
12月9日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (研究保育全体の検討)
12月25日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第4回研究推進委員会 (「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について)
2月5日	須崎市立人権交流センター	研究員会 (研究部からの指導助言を受けての再検討・今後の課題)
3月11日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第5回研究推進委員会 (「幼児教育のあゆみ」のまとめについて)

4. 研究内容

第1回研究保育 6月20日(木) 4歳児きりん組 (男児5名、女児7名、計12名)

本日のねらい(○)と内容(△) (抜粋)

○好きな遊びを通して、友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わう。

△友達遊びに興味をもち、同じことをしたりかかわったりして遊ぶ。

△友達や先生に自分のしたいことや思ったことなどを言葉で伝える。

○身近な素材や用具などに親しみ、遊ぶことを楽しむ。

△石けんを使って泡遊びをしたり、パイプやペットボトルを使って水遊びをしたりする。

△自分なりに考えたことや、やりたいことを十分に楽しむ。

【事例1】4歳児らしいと思われる砂場での水遊びの場面

A男が穴を掘っていると、そばで遊んでいたB男がその穴に入ろうとした。A男は「やめて」と言うが、それでもB男が入ろうとしたので教師がA男の穴の近くに別の穴を掘り「Bくん、こっちに入ろう」と誘った。B男は教師の掘った穴へ汲んできた水を溜め、足を入れた。その様子を見たA男はB男の穴に水を運んで入れたり、自分の掘った穴にも水を溜めたりして「Bくん、こっちも入っていい」と誘った。教師が「こっちも入っていいってAくんが言うよ」とB男に伝えると、B男は笑顔でA男の掘った穴に入り、A男もそれを見ながら笑っていた。

それぞれの穴に水を溜めていると、近くで見ていたC男が「つなげたらいい」とつぶやいた。教師は「それいいね」「Cくんが、ここここをつなげたらいいって言いよったよ」とA男に伝えた。A男は「いいこと考えた」と言い、110mlペットボトルの飲み口を穴の側面に押し当て、ぐりぐりと回しながら穴と穴をつなぐトンネルを掘り始めた。教師が「じゃあ、こっちからも掘ろうかな」と、もう片方の穴の側面から掘っていると、C男は500mlペットボトルを持ってきて教師が掘っていた穴に入れ、底を叩いて穴を深くしようとした。A男は時々穴に手を入れ深さを確かめながら掘り進めていた。教師が「トンネル抜けた？」と聞くと、A男・B男・C男は交互に手を入れ「つながった！」と喜んだ。

その後3人はバケツやペットボトルに水を汲み、穴に入れた。片方の穴には水が溜まるが、もう片方には流れていかない様子を見てC男が「(水位が) 高くないけ」と言った。何度か繰り返し水を入れ水位が高くなるとトンネルから水が流れ、両方の穴に水が溜まっていった。つながったトンネルから水が流れ出る様子を見てC男は「ぐるぐる渦巻きになった」と言った。B男は水が溜まった両方の穴に足を入れた。穴に入ると、B男は「冷たい」と言い、C男は「冷たくない」と言った。A男は何度も水を汲んでは穴に入れ続けながら自分も穴に入り「冷たい」「こっちはあったかい」と3人で話していた。

《遊びから見る4歳児らしい姿》

遊びはじめは特に目的はなく、前日までの遊びの再現から入る

- ・同じ穴でも興味、やりたいことは違う。(A男は穴を掘りたい、B男は穴に入りたい)

遊んでいるうちにやりたいことが変化していく

- ・B男の楽しそうな様子を見て、自分が掘った穴にも入っていいと言うA男。
- ・2人の穴を見て思ったことを言うC男。
- ・C男の言葉を教師から聞き、新たにやってみみたいことができたA男。

目的をもつが共有ではない

- ・2つの穴をつなげるというイメージ(目的)で遊びがつながり、穴を掘っていくが「こうしよう」という訳ではない。
- ・自分なりに考えて道具を選んだり、友達のやり方を見て同じものを選んだりしながらも、使い方は違う。

偶然つながる面白さや楽しさがあり、そこから友達とのかかわりが生まれる

- ・穴が繋がった喜びを感じ、3人揃って水を入れる。
- ・それぞれが容器を選び、水を汲みにいく。穴から穴へと水が流れるかどうかを見たい気持ちは同じなのか、片方の穴だけに水を流し様子を見ている。
- ・教師の問いかけや友達の言葉を聞き、自分の感覚で確かめたり比べたりしたことを、言葉で表している。



これらのことから、個々の楽しみが優先的でありイメージの共有は難しいが、場を共有することで楽しみ方が広がっていることがわかる。その時、その場で居合わせて一緒に楽しむ経験が仲間意識の育ちへとつながり、5歳児の協同へと向かっていくのではないだろうか。

【環境構成と教師の援助の考察】

○教師が互いを意識できる距離に、それぞれにやりたいことができる場を作ったことで「こっちに入ってもいいよ」と自分の掘った穴をすすめる姿につながったと思われる。しかし、すぐに教師が用意するのではなく、A男とB男が、お互いの気持ちを出し合う中で、気付いたり考えたりする姿を待つ援助があってもよかったのではないかな。

○A男が「いいこと考えた」と自分なりに考えて選んだ道具はペットボトルだった。教師は遊びの中で用途に合ったものを考えて準備するが、子どもは必ずしも大人が思うものを選んだり使ったりするとは限らない。“砂を掘るのはスコップ”というような固定観念で環境を用意するのではなく、様々な道具を自分自身で選べる環境をつくっていくことや、その子なりに選んだり使ったりする姿を認めていくことも大切である。

↓ なぜならば……

近くにあった道具や使い慣れたもの、友達が使っているものを、自分なりに使ったり試したりする経験を積み重ねていくことで少しずつ用具の性質や特徴に気づいていき、イメージや目的に合わせて道具を選んで使っていく姿につながっていくのではないかな。

自立心、思考力の芽生え

↓ 今後、必要となってくる環境は……

友達がしていることや使っているものに興味をもち同じように遊ぶ中で、同じクラスの友達だけでなく異年齢児とのかかわりも多く生まれる。年長児をモデルにできるような環境を意図的に作ることで、年長児の姿から刺激を受け、道具の選び方や使い方の工夫が広がってくるのではないかな。

○始めは一人一人がそれぞれの思いで遊んでいたが、だんだんと子ども同士がつながり一緒に遊びを楽しむようになった。そこには教師のつなげようとする声かけがあったが、子どもから教師、教師から子どもというやりとりが主だったので、子ども同士で伝え合う機会は少なかった。友達がしていることに興味や関心をもってはいるので、楽しい雰囲気は伝え、どういうふうにつなげていくかを考えていく必要がある。“つなげる”援助も多様であり、アプローチの仕方によって子どもの反応も変わってくるので、子どもの姿に合わせて声かけの仕方や内容を考えて援助していくことが大切である。

↓ なぜならば……

- ・自分の思いが伝わらない難しさからどうやって伝えようかと考え、上手く伝わらない経験などさまざまな感情を経験する必要がある。伝えたい気持ちが言葉や表現になっていくのではないかな。

協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い

↓ 今後、必要となってくる援助は……

- ・子どもが自分で相手に思いを伝えられるように、教師が支えの存在となりながら、自分で伝えようとする姿を

見守ったり、伝え方を知らせたりしていく。

- 思いを言葉で表現するようになって、相手に分かるように伝えるのは難しいこともあるので、その子が伝えたいことを整理し、分かりやすく伝える仲立ちをしていく。

○子どもがしたいことや、思いや考えを言葉にした時に「いいね」の言葉があった。

↓ 今後も大事にしていく。なぜならば……

自分で遊びながら「気付く」「感じる」ことが大事であり、教師が認め励ますことで、最後までやってみようという気持ちや、やりぬく力、自尊心が育まれる。教師の「いいね」の言葉は自分が認められたという嬉しさだけでなく、その声を聞いた子ども同士も友達の考えやイメージに違いがあることにも気付くことができいく。

健康な心と体、自立心、思考力の芽生え

第2回研究保育 10月31日（木） 5歳児ぞう組 （男児9名、女児4名、計13名）

本日のねらい（○）と内容（△） （抜粋）

- 自分の思いや考えを伝えながら、友達と一緒に遊びを進めていくことを楽しむ。
- △自分の思いや考えを相手にわかるように伝えたり、友達の思いや考えを聞いたりしながら一緒に遊ぶ。
- △友達と考えを出し合いながら、しっぽとりの遊び方を決めたり、人数を合わせようとしたりして遊ぶ。
- 友達や先生と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさやルールのある遊びの楽しさを味わう。
- △友達と誘い合い、しっぽとりをして遊ぶ。
- △しっぽとりをする中で、相手の動きを見ながらしっぽを取ったり、取られないように動いたりする。
- △しっぽとりのルールを友達と伝え合いながら遊ぶ。

【事例2】本日の子どもの姿（しっぽとりの場面）からねらいを考える

赤と黄の2チームに分かれて、教師も仲間に入りホールでしっぽとりが始まった。「○○チームの人」「誰か○○チームになって」と子ども同士で声をかけ合い、同じくらいの数に分かれていた。しっぽは人数より多めにあり、取られてもまだ残っているしっぽ（おかわり）を付け、どちらか片方のチームのしっぽが全部なくなるまでが1ゲームで、終わるとまたチーム替えをして繰り返し遊んでいた。「レディー、ゴー」と始まりの合図はあるが、勝負が決まっても勝って喜んだり負けて悔しがったりする姿は少なかった。出たり入ったりしながらもクラスの全員がしっぽとりを楽しんでいた。

◎子どもの姿 から幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へのつながりを考えてみた

～友達とのかかわり～

- ①しっぽがなくなると、「頑張れ」「○○君が1番強い」「(相手が)油断している時に取るんだ」と同じチームの友達を応援したり、自分が考えた方法を伝えたり、同じチームの友達がしっぽを取った時に、ガッツポーズをして喜んだりしていた。
- ②興味はあるが見ているだけだった子も、友達や教師に繰り返し誘われたり、手を引かれたりすると「わかった、1回だけ」と笑顔で参加し、その後も繰り返し遊んでいた。
- ③みんなの意見が一致したわけではなかったが、タイム場を作ろうとなると、見ていた子も「もっと大きくしてや」と意見を出し、作る方もその意見を受け入れ大きくしたり「いいやん」と認めたりする言葉が出ていた。
- ④しっぽを取る時に体を「おさえた」「おさえてない」のトラブルが多く、当事者だけでなくその様子を見た子も事実を言葉で伝えたり注意したりしているが、言いたいことを言うと遊びに戻ったり、教師が仲立ちに入ると当事者以外はかかわろうとしなくなる姿もあった。

- ①友達と励まし合ったり、協力したり、勝った喜びを共有したりして、“同じチームの仲間”と感じながら遊んでいる。
- ②友達に頼られたり、必要とされたりすることが嬉しい。
- ③自分達が必要感をもったことで、積極的に行動し、必要なものを用意したり大きさや形を考えたりにしている。みんなで使うものとして理解しているから、こうしてほしいという思いを伝えたり、その意見を取り入れられたりする姿につながっているのではないかと。
- ④友達の姿に気付きや関心はあり、意見も言えるようにはなっている。しかし、まだトラブルに関しては自分がかかわっていないと他人事のような意識があるのではないかと。教師の仲立ちが必要だが“先生が解決してくれる”というような思いもあるかもしれない。

自立心、協同性、
道徳性・規範意識の芽生え
言葉による伝え合い

～ルールをめぐる～

- ⑤座りこんで倒れている友達のしっぽを取ったら「いかんで」と言われ、少し立ち止まった後、相手にしっぽを返し遊び始めた。
- ⑥遊んでいる途中で1人の子から「タイム場ありにして」という提案が出たが他の子は「嫌だ」と言い、多数決をとることになった。1対多数でタイム場はなしに決まったが納得できず「もう1回やって」とお願いしたが「1回やって決まったきだめ」と断られた。少し不服そうな顔をしつつも教師の「時間はいっぱいあるから後でまた言ってみたら？」という言葉でまたタイム場なしのルールで遊び始めた。
- ⑦同じ子から再度「先生、タイム場作って」という声があり、教師はその子にみんなに聞いてみるよう言った。もう一度周りの子に聞いてみると、今度は「いいよ」という声が多かった。1人の子が「タイム場作ってもいいけど、ずっとタイムやったらしっぽとりにならん、勝負にならん」と言ったが、「いいやん」と言われ「それやったら勝ち負けとかないで」と言い、その場から離れていった。教師はその子の思いを受けとめながら、周りの子がタイム場ありでやろうとなったいきさつも伝えた。

- ⑤自分達で作ったルールを思い出し、自分の行動を振り返りルールを守って遊ぼうとしている。もっと遊びたい気持ちがあり、自分の気持ちに折り合いをつけることができている。
- ⑥今までの経験から、タイム場を作りたいと思い提案したと考えられる。多数決で決まってもまだ納得できていない表情も見られたが、決まったことだから受け入れようという思いや、それでやめてしまうことよりも遊びを続ける方が楽しいという思い、教師からの言葉で、もう少しタイム場なしでやってみようとなったのかもしれない。
- ⑦タイム場の有無に対しては、その時の気分や状況で決める子が多いと思われる中、前日までの遊びの経験からタイム場を作ることでその中に留まり勝負がつかない状況が生まれることに気付いている子もいて、その思いや考えを言葉にして伝えている。しかし、それに気付いている子はほとんどいない。また、勝負を気にしていない子と意識して遊んでいる子がいることも分かる。

道徳性・規範意識の芽生え、協同性、
言葉による伝え合い、思考力の芽生え

◎考察とねらいの振り返り

- ・自分の思いを言葉で伝え、相手の思いも聞こうとし始めている。気持ちに折り合いもつけられるようになってきているが、まだ教師の仲立ちを求めている姿もある。
- ・自分がしっぽを取られたかどうかにはこだわり、ルールを確認したり守ったりして遊んでいるが、チームでの勝ち負けへのこだわりがなく、勝ち負けに関するルールには必要感をもっていない様子が見られる。
- ・遊びを進めていくことよりも、しっぽとりそのものが楽しいのではないか。

○自分の思いや考えを伝えながら、友達と一緒に遊びを進めていくことを楽しむ。

↑ 教師の意図とのずれがあったのではないか

◎明日へつなげるための環境構成と援助

環境構成

- 園庭や隣接している小学校の運動場でしてみると、床、壁など室内ならではのものがなくなり、遊びに必要な広さを自分達で考え試してみるなど経験できることが増え、“自分達で遊びを進めていく”ことにもつながっていくのではないか。
- しっぽを取られても新たにつけられるしっぽがあることで安心して遊べる姿があったが、勝負が決まっても勝って喜んだり、負けて悔しがったりする姿が少ないことにもつながっていた。しっぽを一人1つにしてみるなど、自分のしっぽにこだわりをもち、守るためにより考えたり工夫したりして動く姿につなげていきたい。

教師の援助

- ルールがないと遊びが楽しくないと感じたり、こうすればもっと面白くなると考えたりして、子ども達がルールの必要感をもった時に確認をする声かけをしたり共通のルールと一緒に考えたりしていく。その際、子どもに任せると意見を出せる子の考えが通ったり、多数の思いに押しきられたりなどの力関係が出てくることもあるので、教師も話し合いに参加して自分からは意見を出しにくい子の思いも聞きながら進めていく。
- トラブルも当事者だけでなく、周りの友達の思いや考えにふれることで、自分を気にかけてくれる友達の存在に気付いたり思い直したりすることにもつながると思うので、見ていた子や関心をもって寄ってきた子から巻きこみ、一緒に考える機会を積み重ねていくことが大切なのではないか。
- 教師も一緒に遊びを楽しむことで仲間意識を育てていく。教師の仲立ちがないと楽しく進んでいかないこともあるので、教師が一步引いて見守る際には「困ったら相談してね」と声をかけておき、子どもが声をかけやすい距離にいるようにする。
- 思いを相手に上手く伝えられない子に対しては教師が思いに寄り添い、自分の言葉で伝えられるようなきっかけをつくる。
- 子どもから出た言葉に周りの子が気付くような声をかけていく。また、子ども達の動きや工夫していること、伝え方などの“その子のよさ”に認め言葉をかけ、周りにも知らせていく。自分のよさや友達のよさに気付くことで友達関係、仲間関係を広げていきたい。

◎翌日の遊びの様子

登園するとしっぽとりしようという声があがり誘い合ってホールで遊び始めた。こうした姿は初めてであったため、教師は遊びには加わらず様子を見守ることにした。子ども達は前日にタイム場の枠を作っていたのでタイム場ありのしっぽとりとなっていた。追いかけられるとすぐにタイム場に戻る姿も多く、どの子もタイム場を拠点に出たり入ったりしながら遊んでいた。子ども達は自分達で遊びを進めながら、時々勝負の状況を教師に伝えていた。

チームを替える時に片方のチームに人数が偏ったことで、教師も入ってほしいと誘われ仲間に加わった。前日にタイム場について反対意見をもっていた子は、遊びには入らず友達が遊んでいる様子をずっと見ていた。何度も誘われた末に遊びに加わり、他の子と同じようにしっぽを取られそうになるとタイム場に戻ったり、前日は壁を背にして相手の動きをうかがっていたのを、タイム場を使うことでじっくりと友達の動きを観察して狙いに行ったりする姿も見られた。

◎5歳児全体の考察

タイム場に関しては前日に反対していた子も活用していたことから「なくても遊べるけれど、あれば便利なもの」と感じているのではないだろうか。

楽しさや面白さを共有し遊びの目的が同じであれば、自分達で思いや考えを伝え合ったり遊びを進めていったりすることができるのかもしれない。主張がぶつかったり目的が違っていたりすると、自分とは違う意見を受け入れにくく自分達で解決していくことが難しいのではないだろうか。また、トラブルばかりではなく楽しいことも一緒に考えていく機会を作り、自分なりの考えを出したり友達の考えを聞いたりして話し合う力をつけていくとよいと思われる。

5. まとめと今後の課題

事例1では、それぞれが自分なりの目的をもって遊ぶ中で、友達と楽しさを共有し仲間意識が生まれるという4歳児の姿があり、その環境構成や援助について考察した。さらにどうしてなのかということを考えることで、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿や5歳児へのつながりも見えてきた。また、個々をつなぐ教師の役割は大切だが、つなげる方法や声かけの内容によっては子ども同士のやりとりが少なくなり、必要ないごこぎを経験できなくなってしまう。自分の思いがうまく伝わらない時、どうやって伝えようかを考え様々な感情を経験することが必要であり、伝えたい気持ちが言葉や表現になっていくのではないか。そして、子どもが自分で相手に思いを伝えられるように、教師が支えの存在となりながら、自分で伝えようとする姿を見守ったり伝え方を知らせたりすることも大切だと学ぶことができた。

事例2では、友達と一緒に遊びを楽しむ姿から、今何を楽しんでいるのかを考察し幼児期の終わりまでに育ててほしい姿へのつながりを考えた。ねらいの振り返りをする中で子どもの実態と教師の意図のずれに気づき、明日へつなげるための環境構成と援助について考えることができ、子どもの今の育ちを捉えることや、今後大切にしていきたいことなどが見えてきたように思う。また教師も仲間となり一緒に考えていくという援助の大切さも再確認することができた。

2つの事例を通して、一人一人が、今何を楽しんでいるのか、集団としての育ちはどうなのかに着目して、援助の方法を考えたり、環境の構成、さらには再構成をしたりすることで、子どもが主体的に遊べるようになるの

ではないかと考える。各年齢の発達をおさえつつも必ずしもその姿が同じように表れるわけではないということも頭におき、目の前の子ども達の今の育ちを捉えていく中で今後どういうところが育ってほしいのか、そのために必要な環境構成や教師の援助は何かということを考え、実践していくことが大切である。また、今年度は5歳児の研究協議の翌日の遊びの様子も見合うことで、子どもの姿の変容から子どもの内面にも迫っていくことにしたが、教師がどのような意図でかかわり、それが子どもの姿にどのように表れているのかまで深く考察することはできなかった。今後はその日の保育だけでなく、協議の内容を受けて教師が環境構成や援助を考えていくことで、子ども達の遊びや姿、心の動きがどう変化していくのかを読みとり、それぞれの年齢の育ちや必要な経験について探っていきたい。

また、事例1では、子どもの姿を見ることに集中できるようビデオ撮影をしていなかったことで遊びの流れや子ども同士の細かいやりとりの記憶が曖昧な部分も多く、考察していく際に出てくる疑問への確認ができなかった。この反省をふまえて事例2では、事実を正確に捉えるために遊びの様子をビデオに撮り多くの目で見て考えていけるようにした。そうすることで子どもの今の育ちを捉えることや、今後大切にしたいことなどが見えてきたと思う。

今年度の課題を生かしながら研究を進めていきたい。

編集後記

本年度も諸先生方のご協力をいただきまして「幼稚園教育のあゆみ その45」を発行することができました。

今年度は研究テーマを「幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるためには、どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目して～」とし、幼児期にふさわしい生活とはどのようなことなのか子どもの実態を捉え、各支部で共通理解をし、実践事例を通して研究に取り組んできました。

11月には、いの町立幼保連携型認定こども園えだがわにおいて、高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会が行われ、3歳児から5歳児クラスの保育を公開していただきました。また、研究テーマに基づき、研究保育を通して協議を深めてきた中部支部での取り組みも発表されました。当日の公開保育では、各年齢同士で共有できる場所に自然物や遊びのコーナーが設定され、クラスや学年を越えて子ども同士がかかわり合えるようにという園の願いが環境構成に反映されていました。その中で、自然物を使って試したり工夫したりして作ることや、戸外で体を動かして友達とかかわって遊んだり、赤土や砂に触れてじっくりと遊びを楽しんだりする姿が見られました。各年齢の分科会では、子どもの具体的な姿や場面から視点に沿った協議がなされました。子どもが“どのように”遊んでいるか根拠となる内面を推し量ることの重要性と、その遊びを通して楽しいだけではおさまらない感情を多面的に見たり、まずは自分で考えながら他者の考えも聞き、いろいろな意見をもとに考えを練り合ったりして明日の保育につなげていくことの大切さを学びました。

発刊にあたり、皆様方のご協力を感謝し、このあゆみが諸先生方や各支部において活用されることを期待し、一層のご指導を賜りますよう、よろしく願いいたします。

令和元年度 幼児教育のあゆみ その45

高知県国公立幼稚園・こども園会

責任者 西村芳美

連絡先 〒785-0201

高知県高岡郡津野町永野267番地1

幼保連携型認定こども園にじいろ園

TEL 0889-55-2234

FAX 0889-55-3061

発行日 令和2年3月31日